†路地裏の風使い†　stray cry baby.

しまこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†路地裏の風使い†　ｓｔｒａｙ　ｃｒｙ　ｂａｂｙ.

【Ｎコード】

Ｎ００８７ＢＡ

【作者名】

しまこ

【あらすじ】

孤立した街にやってきたひとりぼっちの少女と、孤立した塔に住む風使いのお話。

stray cry baby. 01.（前書き）

メルモメールマガジンにて配信、２０００９／１０〜２０１１／１０まで連載。

stray cry baby. 01.

青のキャンバスに、連なる白いパン。
フワフワとやわらかそうなその白パンの表面に、何を塗ったら一番おいしいだろう。
蓋を開ければつやつやきらきら、甘い香りの広がるイチゴジャム？
透明な瓶に光を集めて、琥珀色の輝き放つ蜜林檎？
ほんのり赤く染まったほっぺみたいなモモのジャム、お日様の友達アプリコット、夕闇ブルーベリー。野花の香り集めた欲張り蜂蜜。
とろけるバターにつぶつぶマスタード、酸っぱい刺激ピクルスのせて、生ハムのせて、生みたて卵を茹でてはさんでシャキシャキレタスもおいしそう。
好きなものだけ重ねていったら、一体どれくらいの高さになるだろう？

風に身をまかせ、流れていく雲を眺めていたら、ちぢこまるようにおなかが鳴って、ユウイは草原に寝転がったままがっくりと肩を落とした。
「……おなかがすいていたら、いくさはできないものなのよ……」
栗色の前髪が、草花と一緒にそよそよと風になびいている。甘い花の香りが鼻先をくすぐった。
この風が、香りだけでなく食料を運んできてくれたら、どんなに喜ばしいことか。
ユウイは、目前から手の届かぬ遠くへと流れていく白パンを目で追いながら、どこまでも続く青い空を見ていた。

わたしはママがきらいだし
ママはわたしがきらいです
けれどわたしは気にしません
なぜってわたしもママがきらいだから
これっておたがいさまでしょう？

だからわたしは今日も一日
ママのいうことをきく気はありません

くるしくても　かなしくても
さみしくなって　なみだがでても

このままずっと
ひとりぼっちでも

†

早起きをして、元気よく外へ飛び出そう。
特に、こんな風に時折優しい風が吹く日は。
「いつまで寝てるのユウイ！！　いつまでたってもおふとんが干せないじゃない！！」
街の真ん中一軒家。今日もワーナーさんちのマーガレット奥さん

が、舞台女優顔負けの張りのある声で叫んでいる。
相手はおそらく一人娘さん。
名前はユウイ。
二か月前にこの街へやってきた、小さな女の子。
この朝のやり取り。彼女達が二人でこの街に住み始めてから毎朝の日課で、慣れてしまった街の住人さん達の中に、特に文句を言う人もいなかった。
……今朝たまたまワーナー家の前を通り掛かった野良犬は、驚いて逃げていったけど。
美声の持ち主マーガレットは、ふとんにくるまり芋虫のようになって動かないユウイをふとんごと抱え、勢いよく窓の外へと放り投げた。もちろん、ふとんの両端はしっかりと掴んで、だ。
ごろろ、と華麗に一回転して表に放り出された羽化前のユウイは、べしゃり、と優雅に着地して草原に寝転んだ。何しろ羽化前だったので、どんなに素敵に着地してみせても、どろどろの中身はなかなか起き上がることが出来ない様子だった。
「いーい？　今日もお夕飯まで帰って来ちゃ駄目だからね！　お友達が出来るまでおうちに入れません！　分かってると思うけど！」
ぴしゃり、と窓のしまる音。何ごとも無かったかのように、街の人々がユウイの前を通り過ぎて行く。それはきっと、もう慣れっこだから。いつも通りの朝が始まった、と。
物陰から様子をうかがっていた野良犬が、もっそりとユウイに近付いて匂いを嗅ぎ始めた。どろどろのユウイは地面に顔を付けたまま「ほっといてちょうだい！！」と野良犬を一喝する。それでも野良犬は、よほどおなかが空いているのかなんなのか。立ち去らずユウイの匂いを嗅ぎ続けていた。
地面に伏せたままのユウイがのろのろむくりと顔だけを起こし、野良犬と顔を見合わせると、目が合った瞬間野良犬の動きがぴたりと止まり、それから尻尾を丸めて走り去ってしまった。
「デリカシない犬なのね！！」

ユウイは涙と鼻水を地面に落としながら、もう姿の見えない野良犬に向かって肩をいからせ、涙声でそう叫んだ。たまたまそこを通りかかった杖つくおじいさんが、そんなユウイの姿を見て驚いていた。

ユウイはポケットを探ると、取り出したティッシュでありんこがくしゃみするみたいに鼻をかみ、顔の中心を真っ赤にさせながら、さて、これからどうしようかと不器用に腕を組んで考え始めた。どうにかしておうちに入りたいご様子で、文字通り頭をひねり、足も交差させ、全身を使って考え始めた。そしてどんどん体が斜めになっていくなか、ユウイの頭の中で豆電球がパッと光った。

今日はとってもいいお天気。

ユウイはマーガレットがおふとんを干すと言っていたのを思いだし、それなら、いつもおふとんを干す時に開け放しているおうちの裏の窓から入ろうと、二件先の杖つくおじいさんちとそのお隣りのお菓子屋さんの間を抜けて裏へ回り、急いで駆け出していった。

真っ赤なお鼻の駆け足ユウイは、息を切らせ、体を斜めにしながら細い裏道を通り抜けて行く。途中、おそらく杖つくおじいさんちのものであろう大きなブリキの蓋つきバケツを見つけ、それを両手で引きずりながら、やっとのことでおうちの裏へとたどり着いた。

予想通り、窓はおふとんを干すために開け放たれ、さらに都合の良い事にマーガレットの姿はそこに無かった。

鼻たれユウイはキラキラとそのキャラメル色の瞳を輝かせながらブリキのバケツを窓の下まで運び、その上によじ登って部屋の中への侵入を試みた。

と、その時、目の前が突然真っ暗になり、何かやわらかい感触に押し出されるようにして地面に投げ出されてしまった。

くらくらちかちか。ユウイの頭上をお星様が舞う。

そこに、昔話に出て来る女王様のような声が降って来て、ユウイの頭上のお星様が弾けた。

「二階じゃないのが幸いね」

頭をぶんぶん振りかぶり、声のする方を見上げれば、まるでユウイを馬鹿にするかのように窓が真っ白なおふとんの舌をべろりと覗かせていた。
「あんたの考える事なんてお見通し。さぁ、さっさと出掛けなさい。今日は始まったばかりなんだから」
女王マーガレットは、窓から飛び出す舌の上に頬づえをつき、ふとんたたきの杖を持ってユウイを見下ろしている。
そのままママなんか窓の口に飲み込まれちゃえばいいんだと、ユウイはひっくり返ったまま目一杯頬を膨らませ思った。

†

その後も何度かおうちの中への侵入を試みたユウイだったが、女王様の防御率はとてつもなく高く、断念せざるを得なかった。
ユウイはブリキのバケツを引きずりながら、とぼとぼと裏道を引き返した。バケツを拾った場所まで戻ると、足下に一匹のナメクジが這っているのを見つけた。
「あなたもおうちがないのね、かたつむりさん」
ユウイはきょろきょろとあたりを見渡し、小さな空き瓶を見つけると、「これでひとあんしん」とそれをナメクジの上にかぶせた。
それからしばらくナメクジ観察をしていたユウイは、自分もブリキのバケツを逆さまにしてかぶり始めた。すっぽりと自分の体が収まって、暗闇が思いのほか心地よかったのと、ここに隠れていれば誰にも見つからないだろうと考え、ユウイは今日一日この中にいようと決めた。
（おうさまがいれば、きっとたすけてくれるのよ）

ユウイは暗闇の中で「おうさま」の事を考えていた。いつも自分には甘かった「おうさま」。女王マーガレットの夫であり、自分の父であるクレス。気弱な彼はいつもマーガレットの尻に敷かれていたので、王様というよりは召使に近かったのかもしれないが、ユウイにはいつも優しくて、ユウイがマーガレットに叱られている時はいつも助けに来てくれたのだった。

（にしのもり、かえりたいなぁ。おばあちゃん、げんきかなぁ）

小さくため息をつくと、一緒に涙もこぼれ落ちそうになった。

今から二か月前の事。

突然、ユウイと祖母が二人きりで暮らしているところへ、一年前に父と離婚したきり会っていなかった母、マーガレットが「迎えに来た」とだけ言い、ユウイと荷物を抱え西の森の父の実家からユウイを連れ出した。一緒に住んでいた祖母は目を丸くしておろおろとしていたし、ユウイも何が起きているのか理解できなかった。父はもう何か月も前から家にはたまに帰って来る程度で、最近ではまったくといっていいほど顔を見せなくなっていたし、その日も不在だった。

「パパは？　おばあちゃんはいっしょじゃあないの？」

マーガレットは無言で振り返り、祖母に一度だけ深く頭を下げた。

ああ、おばあちゃんは一緒じゃあないのね、と、それだけは理解する事ができた。

それから数日かけて、ユウイとマーガレットはこの街、ベーグルノーズにやって来た。訊けば、マーガレットの生まれ故郷だという。

「今日からここでママと二人で暮らすの。いい？　これからは何でも一人で出来るようになりなさい。甘ったれは許しません」

街に着いて一日目の朝。そう言ってマーガレットは仕事に出掛けて行った。西の森を出て数日経っても、ユウイには何が起きているのか分からなかった。とりあえずおなかが鳴ったので、台所を覗いてみる。自分で朝食の準備をするのは初めてだったので、目玉焼き

の黄身はぐしゃぐしゃだったし、それを独りで食べる自分の顔も同じだった。
　気晴らしに外へ出てみようか。外はいいお天気。けれどおうちから一歩出てみれば、道行く人々の誰もがユウイを知らなかったし、ユウイも誰も知らなかった。街に出るとよけいにひとりぼっちが強調されているように感じた。
　それでも勇気を出して、自分と同じ年頃の子たちに話しかけてみる。
「めんどくさいこ」
「へんなこ」
　と言われ、馬鹿にされるようになった。緊張のせいか、自分の言いたい事が伝わらない事が多かった。そのせいだろう。人と話す事は決して嫌いな事ではなかった。そのはずなのに。
　ふとんの中に逃げ込む日々が続いた。
　一週間、二週間、一ヵ月経っても、マーガレットは父や祖母について何も話してはくれなかった。ただ、父について一言「勝手な人」と言っただけだった。
　何故か世間話は飽きるほど聞かせてくれるのに。一番訊きたい話は訊いてはいけないという暗黙のルールが自然に出来ていた。
　そうして二ヵ月が過ぎ、ユウイはおふとん王国から追い出されるようになり、こうして街を彷徨う日々が続いている。
　バケツの中で大きく溜め息をつくと、ぼこん、という音が頭の上で響いた。ユウイは驚きバケツをほんの少しだけ持ち上げて外の様子をうかがう。すると足下に黒い影が現れ、ユウイの靴をばりばりと引っ掻き始めた。それに驚いたユウイがバケツをさらに持ち上げようとすると、さらにぼこん、ぼこんと音がして、どんどんバケツが重くなり持ち上がらなくなっていった。ユウイは焦りバケツの中で「だして！？　だして！？」と何度も叫んだが、バケツは重くなる一方だった。
　不気味な物音が怖くなってきたユウイは、バケツの底を力一杯押

し上げた。そうして出来た隙間から這い出るように脱出すると、今度はお尻を何かに引っ掻かれた。振り返ると、真っ黒な子猫がユウイのお尻に威嚇している。脱出したバケツの上には大きなぶち猫が二匹、我が物顔で乗っかっていた。

ユウイはなるべく猫を刺激しないようゆっくりとその場を離れようとした。けれどユウイのそんな気持ちもお構いなしに、子猫がユウイに突撃してくる。ばりばりとそこらじゅうを引っ掻かれ、ユウイは泣きながら裏道を駆け抜けた。

息を切らせ街の大通りに出たユウイは、背後を確認し、さらに全身をぱたぱたと叩きその場で一回転して子猫がついて来ていないかを確認する。そうして子猫がいない事がわかると、ほっと息を吐いて鼻をすすった。

「ねこさんこわい……こねこさんなのにこわい……」

せっかく見つけた安息の地を追われ、ユウイは仕方なく大通りをとぼとぼ歩き始めた。なるべく行き交う人々の目に止まらぬように歩道の隅を早足で歩いた。ただ街を歩いているだけなのに、冷や汗が背中をつたう。何故何もしていないのに、悪い事をしているような気分になるのだろうか。

大通りの一角で足を止め、辺りを見渡し、建物と建物のあいだにわずかな隙間を見つけると、ユウイはその隙間に隠れ今朝自分と一緒に追い出されたお気に入りのクマのポシェットをごそごそと探り始めた。中にはハンカチとティッシュに、飴が三つと、銀貨が一枚。銀貨に覚えがなかったので、おそらくマーガレットが入れたのだろうとユウイは思った。お夕飯まで帰って来るなということなので、お昼ご飯を買うお金だろう。

ポシェットの中を確認していると、どこからともなく流れてくる甘く香ばしい匂いがユウイの鼻先をくすぐった。ぐぐぅ、とおなかが苦しそうな声を上げて、ユウイに訴えかけてくる。近くの雑貨屋さんを覗いてみれば、店の時計は十二時を指していた。

「もうおひるごはんなのね……。おひるごはん、たべてからおいだ

されればよかったわ……」
甘い香りに誘われて、ユウイは匂いのする方へとふらふら歩き始めた。早く！　早く！　と急かすようにおなかの虫が鳴いている。自然と早足になって、気がつけば大通りの中ほどにある一件の店の前に来ていた。
店の前で立ち止まったユウイは、店の看板を確認すると唇を尖らせた。看板には“喫茶カルペ・ディエム”と描かれている。だがここが喫茶店ではない事をユウイは知っていた。
背伸びをして、ユウイはショウウィンドウを覗いてみる。すると、そこにはおいしそうな白パンやクロワッサン、木の実の詰まったパンやサンドイッチがずらりと並べられていた。ユウイがさらに店の奥を覗き込もうとショウウィンドウの前でぴょんぴょん跳ねてみると、奥には色とりどりのジャムや蜂蜜、ドライフルーツ等が見え、そしてその横のレジには白髭のおじいさんが立っているのが見えた。
（きょうは、くろいあたまのこ、いないわ）
ユウイはほっとため息を吐き、その場にしゃがみ込んだ。おうちを追い出されるようになってから、ユウイは何度かこの店の前まで来た事があった。看板は喫茶店でも、この店はパン屋さん。いつも店の前には良い香りが漂っていて、ユウイのおなかを刺激する。けれどユウイはいつもこの店に入る事が出来なかった。店の奥を覗くといつもそこには、さっきユウイを追いかけてきた黒猫のような黒い髪の少年がいて、まるで威嚇するかのようにレジの前に座っているからだ。実際あの猫のように引っ掻かれた事などは一度もなかったが、大人から子供まで威圧する空気を放ちレジを打つ少年の姿は、ユウイにとって脅威だった。見ているだけで怖いのだ。
その少年が、今日はいない。ユウイはもう一度確認のため店の中を覗き込んだ。やはりレジの前にいるのは白髭のおじいさんだった。
（きょうなら、おかいもの、できるかな？）
店の中をきょろきょろ覗いていると、ユウイは何やら店の真ん中に小さな塔のようなものがあるのを見つけた。目を凝らしてよく見

ると、それはシュークリームでできた塔だった。
（なんだろう、あれ……たべられるのかしら？）
もっとよく見えないものかと、ユウイはつま先立ちになり、バランスを崩してショウウインドウにへばりついた。シュークリームの塔の向こう側にいる白髭のおじいさんと目が合った。
のんびりレジを打っていたおじいさんは、目をぱちくりとさせ、絵本に出てくるサンタクロースのようなふわふわの髭を確認するように撫で付け、ユウイを見つめた。店の客も、おじいさんにつられるようにユウイを見ていた。自分に注目が集まっているのを感じたユウイは、顔を真っ赤にしてその場を走り去ろうとしたが、ユウイがお店の扉の前を通り過ぎようとしたところで扉が開き、運悪くそれに激突するはめになった。
扉の前で頭上にお星様をきらめかせていると、目の前に、自分とそう歳の変わらぬ少女が眉をひそめて立っていた。ユウイは慌てて立ち上がり、その場から逃げるように走り出した。
大通りを全力で走っていると、途中で何度かさっきの少女の表情を思いだし、ぽろぽろと涙がこぼれ落ちそうになった。お店のお客さんもあのおじいさんも、きっと今ごろ自分を笑っている。そんな気がして、ユウイはお店が見えなくなっても走り続けた。待ちを行き交う人々も、自分を見て笑っているに違いない。そう思うと顔を上げる事が出来なかった。見えない何かに追われているような恐怖に耐えきれず、気がつけばユウイは人気のない路地裏へと向かい駆け出していた。
路地は迷路のように入り組んでいる。だから路地裏の奥に入ると一人で帰ってこれないよと、ユウイはマーガレットに言われた事があった。けれど今はそんな事はどうでもよかった。ただただ恥ずかしくて悲しくて、人のいないところへと逃げたかった。
大通りをだいぶ離れたところで、ユウイは古い商店の崩れた壁につまづき、転んだ。転んだ拍子に涙がぽろりとこぼれ落ちて、それまで我慢していた辛い事や悲しい事がすべて溢れ出しそうになった。

うつぶせのまま倒れていると、何かがユウイの頭をつついた。ユウイが顔を上げると、そこには、今朝おうちの周りをうろついていたあの野良犬がいた。

野良犬がユウイの匂いを嗅ぎ、頬を舐めた。なぐさめてくれるのかしらとユウイは思った。ユウイが野良犬の頭を撫でると、野良犬はユウイのお腹に顔をうずめてまた匂いを嗅ぎ始めた。

と、次の瞬間。

野良犬が何かに追われるように走り出した。するりと何かがすり抜けて行く。えっ？　とユウイは走り去る野良犬の後ろ姿を見つめた。そして自分の体のあちこちを叩いて確認する。

「……ポシェット！！」

お気に入りのクマのポシェットがない！　ユウイは慌てて野良犬を追いかけようとしたが、すでにその姿は見えなくなっていた。

入り組んだ路地に一人、ユウイは取り残されてしまった。

†

野良犬を探し出すため、しばらく周辺を行ったり来たりしていたユウイは、気がつけば路地裏に飲み込まれていくように奥へ奥へと足を踏み入れていった。今までも何度か人目を避けるために路地裏に入った事はあったが、こんなに奥まで入り込んだのは初めてだった。薄暗く人気のない路地は少し無気味だったし、なによりマーガレットが「路地裏の奥へは危険だから絶対に行かない事」と言っていたからだ。

奥へと進んでいくうちに、ユウイはマーガレットが危険だと言っていた意味を、身をもって理解していた。古びた建物は今にも崩れ

落ちそうだったし、すでに崩れた煉瓦はそこらに転がっているし、潰れたお店のショウウインドウは割れて、ガラスが散乱している。
ユウイは次第に怖くなり、引き返したくなったけれど、持っていかれたクマのポシェットがどうしてもあきらめられなかった。歩きながら、ユウイはマーガレットやクレスと暮らしていた時の事や、西の森のおばあちゃんの事を思い出していた。みんな一緒で仲のよかった頃、あのクマのポシェットも、いつも一緒だった。物心つく頃には、すでにクマのポシェットはユウイの元にいた。本当に、いつも一緒だったのだ。
見つかるまで、泣かない。またこぼれ落ちそうになった涙を袖で拭って、ユウイは歩き続けた。途中何度も崩れた煉瓦に足を取られ転んだので、スカートは泥だらけだったし、足は傷だらけだった。おなかも空いていた。いつの間にか街からずいぶん離れた場所に来ていたようだったが、頭の中はポシェットでいっぱいだったので、ユウイはそのままどんどん奥へと進んでいった。それに、このまま歩き続けていれば、ずっと一人でいられるような気がした。
そんな事を考えていたその時、どこかで、ガシャ、という物音がした。
ユウイは身をこわばらせ足を止めたが、すぐに気のせいだろうと考え、再び歩き始めた。
が、今度はユウイのすぐ近くでガシャリ、という音が聞こえた。
（だれかいる……！！）
ユウイは崩れかけた壁にへばりつき、しゃがみこんだ。こんなところに誰か来るなんて思っていなかったので、すぐにあの野良犬ではないかと考えた。おそるおそる壁から顔を覗かせてみる。けれど、そこにあるのは瓦礫やガラス、壊れたバケツや折れたパイプばかりで、生き物の気配なんてどこにも無かった。
気のせい、そう考え深い溜息をつくと、ユウイは足下に何やら長い影が伸びているのに気付いた。ユウイがその影が移動して行くのを目で追うと、その先に人影のようなものが見えた。それは、背中

から何本も腕が生えていて、歩くたびにその手がまるでおいでおいでをしているように揺れていた。
ユウイはその影がいなくなるのを、目を閉じ息をひそめて待ち続けた。しばらくしてから薄目を開けて影がいなくなったのを確認すると、一目散にその場から逃げ出した。細い路地を駆け抜けると、何故か先ほど通った道とは違う道に出てしまった。慌てて来た道を引き返すと、また見たことのない道に出てしまった。
ユウイの顔がどんどん青ざめる。
路地を行ったり来たりすればするほど、知らない道に出てしまう。ユウイは何度か行き来を繰返したところで、自分が道に迷った事を知った。薄暗い路地の真ん中で、途方に暮れて座り込む。急に足の擦り傷が痛んだ。
ガシャリ、と、またあの音が聞こえてきた。ユウイはその音から逃げようと、よろよろ歩き始めた。少し歩いたところで、いつもの大通りが見えた気がして走り出した。あんなにひとりぼっちがよかったのに、今は誰かに会いたくて仕方がなかった。
路地を懸命に走り抜けたユウイは、目の前の光景に愕然とした。迷路のように入り組んだ路地を抜けて現れたのは、いくつにも連なる古びた屋敷の群れだった。どの屋敷も朽ちていて、とても人が住んでいるようには見えない。どこからどうみても廃墟だった。
ユウイの頭に、最近絵本で読んだおばけ屋敷が浮かんだ。そして、さらにその廃墟と廃墟の間を、黒い影が横切るのを目撃した。ユウイの顔からますます血の気が引いていく。
（いきているにんげんもこわいけど、おばけにあいにきたわけでもないのに……！！）
ユウイはすぐさまこの場から離れようとしたが、自分がどこから来たのか全くわからない状態になっていた。とりあえずまた来た道を引き返そうと振り返り、そこで小さく悲鳴を上げた。
（がげがちかづいてくる……！！）
何故、先ほどまで目の前にいた影が自分の後ろにいるのかわから

なかった。ユウイは転がるように廃墟に向かって走り始めた。しかしすぐにそれが間違いだったと気付いた。廃墟はどれも似た造りになっていて、見分けがつかない。路地を行ったり来たりしたときと同じように、今度は廃墟の群れの中で迷子になってしまった。

どうする事もできなくなったユウイはその場にへたりこんだ。ガシャリ、ガシャリ、と奇妙な音が自分のすぐそばまで近付いてきては遠ざかる。それがユウイの不安と恐怖を煽った。

ユウイはなんとかこの場をやり過ごそうと目を固く閉じ、耳をふさいだ。そうしてしばらく息を潜めていたユウイだったが、真っ暗で何も見えず聞こえない状態が、よけいに不安を煽った。たとえば、自分が目を閉じている間に何かが起こり、そして得体の知れない何かに見知らぬ土地に連れ去られてしまうのでは。そんな考えが頭をよぎった。

「それはいや……！！」

ユウイはおそるおそる目を開いた。自分の周りに誰もいない事を確認すると、耳をふさいでいた手を放す。奇妙な音はもう聞こえてはこなかった。

「こんなまち、もういや……ぜったいおばあちゃんのところにかえる……」

ユウイはふらりと立上がり、歩きだそうとして、けれどその場に立ちすくんだ。

「かえりみち……わからないんだった」

ユウイは堪えきれず泣き出してしまいそうだった。野良犬も見つからないので、ポシェットもみつからない。もう泣くのを我慢していても、仕方がない気がした。

「みんなかって……かってすぎるわ……かってにいなくなったり、あらわれたり、つれてきたり……きらいになったり」

今は怖いというよりも、寂しくて虚しくてたまらなかった。こんなことなら、さっきの物音の正体に連れて行ってもらった方がましだったかも知れないとさえユウイは思った。

涙で滲んだ目を袖で拭いながら、今までの出来事やこの街に来てからの出来事を思いだし、胸の中がじわじわ押し寄せて来る暗闇に飲み込まれていきそうだった。

「もういや！　ぜんぶわたしのせいじゃないのに！！」

今まで我慢していたものが、叫び声になって一気に吹き出した。廃墟の隙間に、自分の声が吸い込まれていくのを感じた。どんなに泣いても叫んでも、誰にも自分の声は届かない。けれど、そんなことはもうどうでもよかった。もう、誰の顔も見たくない！　そう叫ぼうとした瞬間。

チリン……と、鈴のような音色が、耳の奥に広がった。

「なに……？」

ユウイは、はっとして周囲を見渡した。するとまた小さく鈴の音が広がって、今度は地面の草花が小さくゆらゆらと揺れ始めた。

「……なに？」

不思議と恐怖は無かった。ユウイが再び周囲を見渡そうとした瞬間、今度は後方から廃墟の群れに吸い込まれるように風が吹き、ユウイの二つに分けて結んでいた髪がふわりとそよいだ。地面の草花が大きく揺れ、砂埃が舞い上がる――。

「かぜ……？　けれどふつうのかぜじゃない……」

鈴の音が優しく耳元をかすめる。気がつけばユウイは、全てのものがその風と共に廃墟と廃墟の間に吸い込まれていくような錯覚に捕らわれていた。

「つばさ……？」

けれど、それには頭も胴体も無かった。真っ白な一対の翼だけが、風に乗って羽ばたいている。気がつけばユウイは、その翼に誘われるように走り出していた。もうこの場所に、恐怖も寂しさも感じていなかった。

鈴の音が、またユウイの耳に届いた。さっきよりも大きくなった気がした。

「このさきに、だれかいるの？」

ユウイはその音を頼りに、背中には暖かい追い風を感じながら、廃墟の群れを走り抜けていく。目の前の翼を見失わないように、何度も崩れた煉瓦や石に足を取られ転びそうになりながら、ユウイは息を切らし走り続けた。

「ここは……」

暗く長いトンネルを抜けたように、一瞬目が眩んだ。

ユウイの目の前に、広大な砂の大地があった。そしてそこには水の抜けた湖のような大きなくぼみがあり、その中心を小さな翼が旋回していた。

おそるおそる、ユウイはくぼみに近付いた。この大きなくぼみのことを、ユウイは知っていた。

「せんそうの、つめあと……」

今から何百年も前の出来ごとなのに、今も変わらずに残っている、大きな爪痕。

ユウイは吸い込まれるように、くぼみの中を覗き込む。そこには、見たことのない錆びた金属製の板や棒、導線などが半分以上砂に埋もれ、散らばり、突き刺さっていた。

そしてその中に、どうやって見てもこの場に似つかわない人間の後ろ姿を見つけた。

淡い金色の髪と真っ白な服の袖がキラキラと光を浴び、風に揺れ、手首に通されたいくつもの輪がチリンと小さく音を立て、揺れる。

この街に来てから、まだ一度も見たことのない人物だった。あんなに綺麗な髪の人は、今まで見たことがない。ユウイは足音をたてないように気をつけながら、身を乗り出してさらに崖のようなくぼみの淵から中を覗き込んだ。白い翼が、その人物の周りを旋回し、華奢な手の上に舞い降りた。

（おんなのこ……？）

ユウイはその人物の顔がもっとよく見えないかと、さらに身を乗り出した。

その気配を感じたのか、相手がこちらを振り返った。

目が合った。
（おんなのこ。しかもきれいでかわいい）
遠目に見ても、その少女の容姿は目に甘かった。琥珀色の大きな瞳が揺らいで、こちらにとても驚いている様子だった。
しばらくすると、少女がこちらに向かって歩き始めた。少女にみとれていたユウイは、そこでふと我に返った。
このままだと、きっと何か少女に訊かれて話さなくてはいけなくなるに違いない。それは嫌だ、と、ユウイはその場から逃げ出そうとした。しかし、逃げ出したら、帰り道を誰に訊けば良いのだろう？　そう考えると、身動きがとれなくなってしまった。
少女はユウイの真下まで来ると、不思議そうに首を傾げた。ユウイは、やっぱり誰かと会話するのは怖いと、その場から逃げ出そうとした。
振り返り走り出そうとしたその時、周りの風景がぐらりと揺れた。くぼみの淵に立っていたせいでバランスを崩し、砂に足を取られた。
（おちる……！！）
くぼみと言ってもかなりの深さがある。きっとこのまま自分は死んでしまうに違いない。ユウイは固く目を閉じた。
（このまちにきたのが、きっとすべてのまちがいだったんだわ）
ガクン、と、何かに腕を引っ張られて、ユウイは目を開いた。上を見上げれば、自分の腕を誰かが引っ張っている。そして足下では、少女が目一杯手を伸ばし自分を受け止めようとしてくれていた。
腕を掴んでいる誰かが、ユウイの腕を掴んだまま、くぼみの所々から飛び出している金属の上に足をかけ、ゆっくりと降りていく。そうしてユウイは少女の手の届くところまで降ろされ、少女に腰を支えられると、そのまま抱き締められた。
少女に抱き締められ、しばらく唖然としていたユウイだったが、恥ずかしくなってきたのか顔がどんどん赤くなっていった。それに気付いた少女が、心配そうにユウイの顔を覗き込む。ユウイの顔はますます赤くなった。

「いいかげん、放してやれよ」
背後から呆れたような声がして、ユウイの体がこわばった。少女が手を放すと、ユウイはその場にへたりこんだ。今日は、一体何度腰を抜かしただろう。
「おまえ小さいんだから、受け止められるわけないだろ。よく考えて行動起こせよ」
小さい、と言われたので、自分の事を言われているのかと思ったユウイは、その場で俯きちぢこまるように膝を抱えた。すると、少女もその場にしゃがみ込んだ。
きっと、なんて変な子だろうと思われてるに違いない。もう一人の誰かと、今に大笑いされるに決まっている。ユウイはこのままくぼみの中で砂に埋もれて死んでしまいたいと思った。
が、ユウイの予想に反して、少女はユウイの頭の上に手を乗せ、ユウイの頭を撫で始めた。驚いて顔を上げると、少女が優しく笑いかけた。その笑顔を見て、ユウイは泣き出したい衝動に駆られた。
けれどユウイは、自分の背後にある人影に気付き、鼻をすすりながら後ろを振り返った。すると、綺麗な蒼い瞳がこちらを見つめていて、そして一言言い放った。
「汚い顔」
と。
ユウイの頭に、大きなお星様が直撃したように感じた。口をぱくぱくさせ、必死で何か言葉にしようとしたが、言葉にならなかった。
「大体、こんなところで何やってんだよこの馬鹿！！」
いきなり怒鳴られて、ユウイはさらに驚いた。蒼い瞳の少年が、口をへの字に曲げ、ユウイの前で仁王立ちしている。その姿は、怒ったときのマーガレットに良く似ていた。
「パン屋の……おじいちゃんとこの……？」
ユウイはこの少年の顔に覚えがあった。この街に蒼い瞳で黒髪の少年は彼一人しかいない。確か、この少年の名前はヨーダだ。
彼の瞳は、この街の誰よりも深い色と輝きを持っていた。世界中

を探せば、黒髪で蒼い瞳の人間なんていくらでもいるに違いなかったが、彼のそれは、ユウイには少し違って見えていた。
そして、彼は無口で無愛想なことで有名だった。ユウイもマーガレットと初めて彼の家へ挨拶に行ったとき、奥で店番をしていた彼を見て、このひととはぜったいなかよくできそうにないのよ……と、十代とは思えない彼の威圧感（店番なのに）に怯え、早々に帰った記憶があった。
「一体どうやってここまで来たんだよ……何しに来たんだ？」
ただの質問も、彼の口からだと今のユウイには尋問のように聞こえてくる。ユウイは完全に萎縮してしまい、何も答えることが出来なかった。
「……とにかく帰れ。おまえ、ここには来てはいけないって親に言われなかったのかよ」
俯き黙り込むユウイを見て、ヨーダが溜め息をついた。その溜め息を聞いて、またユウイの目に涙が滲んだ。悪い事なんて、何もしていないのに。
（いつもそう、みんなおなじように、さいごにためいきつくんだわ）
バチン、と、頭の上で音がした。おそるおそる顔を上げると、少女がヨーダの口に両手を当てていた。
「いてぇな！　お前はこの状況で喧嘩売ってんのか！」
ヨーダが、不機嫌そうに少女の手を振り払う。少女も不機嫌そうにため息をつき、それから人差し指で口の周りに円を描き、指を折り曲げた。
「あー……はいはい、どうせ俺はいつも口が悪いですよ」
ヨーダは少女から目を逸らし、あからさまに不機嫌な態度を見せていた。
「ここにいた事がバレたら、一番まずいのはお前だろ……」
少女がヨーダの言葉に答えるように手をひらひらと動かすと、ヨーダが深いため息をついた。ユウイはその様子を見て、あれ？　と首をかしげた。

（このこ、さっきからひとこともはなさない）
二人のやりとりから、少女は耳は聞こえている様子だった。けれど一言も言葉を発しないので、もしかすると喋れないのではないかとユウイは思った。
しばらく二人の様子をうかがっていると、少女がユウイの前までやって来てしゃがみこみ、指で地面の砂をなぞり始めた。
ユウイは自分の目の前にある顔を、まじまじと見つめた。長い睫毛と琥珀色の瞳がとても綺麗だった。
ユウイの視線に気がついたのか、少女が顔を上げた。そしてトントンと地面を叩いた。見ると、砂の上に文字が短く書かれていた。
“名前は？”
真っ赤な顔でしゃくり上げ、瞳を潤ませるユウイを見て、少女は“ゆっくりでいいから”と砂の上に付け加えた。
ユウイは呼吸を整えて、少女の優しい瞳を見た。
「……ユウイ。あなたは？」
少女が再び砂の上をなぞる。
“カナタ”
砂の上にはそう記されていた。
「……風使いだよ」
ヨーダがため息をつき、付け加えるように言う。どこか諦めたような口調だった。
「かぜ、つかい……？」
「そう。風使い。風の塔の」
「聞いてないか？」と、ヨーダがユウイに問う。そこでカナタと名乗る少女が、困ったような顔をヨーダに向けた。
「かぜつかい……？」ユウイは首をかしげ、ヨーダを見た。どんなに頭を巡らせても、風使いなんて誰からも聞いた事が無かった。もちろんマーガレットからもだ。
カナタがヨーダに何かを伝えると、ヨーダは「大丈夫だろ」と一言だけ答えた。カナタは自分の正体をあまり知られたくないように

見えた。
「今更だろ。それに、俺コイツの事知ってるよ。名前聞いてだいたいわかった」
ヨーダのその言葉で、ユウイはぎくりとした。自分の事を知っている。おそらくそれは良い意味ではないだろう。街でのユウイといえば、めんどくさくて変な子なのだから。
「言いふらすような相手がいないから、妙な噂も広められないだろ」
ユウイの顔が、恥ずかしさからみるみる赤くなった。そんな事、今初めて会った人にまで言うことないじゃない、と。
ユウイの顔色を見て、カナタがきょとんとしている。ユウイがカナタを知らないように、カナタもユウイの事を全く知らないようだった。
「……それって、どういういみなのよ」
「どうって……それは自分が一番良くわかってんじゃないのか？」
分かっていても、ユウイは聞き返さずにはいられなかった。ユウイの顔がますます赤くなる。それは恥ずかしさからではなく、怒りの気持ちからだった。
（むひょうじょうでぶあいそう、おまけにせいかくはいじがわるい！！）
ユウイは砂の斜面から突き出している鉄骨に足をかけ、砂の斜面をよじ登り始めた。
「どこへ行く気だ？」
「かえるのよ！　いまからいいふらしてくる！」
「言い触らすって、何を？」
自分でも、一体何を言い触らそうとしているのかよくわからなかった。二人は一体何を隠したいのだろう？
けれどそれよりも、ヨーダの態度や物言いが気に食わなかった。だから言い返してみた。それだけだった。こんなに腹が立つのは初めてだとユウイは思った。
「なにをって、いろいろ！！」

「お前、帰り道わかるのか？」
「……わからない！！」
そうだ、自分は迷子の身なのだ。ユウイはぴたりと足を止め、そしてそのまま砂の斜面をずるずると滑り落ちた。
「……おりられない」
斜面の途中で降りられなくなったユウイの脇を、仕方なくヨーダが抱えて地面に降ろした。その後ろで、カナタが両手で顔を覆い、肩を小刻みに揺らしている。それを見たユウイが、なんて失礼な二人なの！！　と言おうとしたところで、邪魔が入ってしまった。
グキュルルル……。
一瞬時間が止まったかのようだった。ユウイのおなかの虫が、ここぞとばかりに鳴き始めたのだ。
「……お前、それは面白すぎるだろ」
ユウイは涙目になりながら、恥ずかしくて死にそうなのを必死で堪えていた。
「仕方が無い、連れて帰るか……カナ、これ持ってろよ」
ヨーダはカナタに小さなネジや導線を渡すと、ユウイに背中に乗れと促した。
「くつじょくてきだわ……」
そう呟くと、ユウイはヨーダの背中に顔を埋めた。「鼻水つけんなよ」とヨーダに言われて、ユウイはヨーダの背中を何度もポコポコと殴ってやった。
「お前、本当に何でこんなところに一人で来たんだ？」
砂の斜面を登りながら、ヨーダが不思議そうにユウイに訊いた。そういえば何でこんなところに来たんだっけ？　と首を傾げたところで、ユウイは「あっ！」と声を上げた。
「ポシェット！　ポシェットをさがしていたの！　のらいぬに、もっていかれて」
「ポシェット？」
傾斜を登り切ったところで、ヨーダは下にいるカナタに登って来

るよう声をかけた。それからユウイを背中から降ろすと、何やらごそごそと自分のポケットを探り始めた。
「もしかして、これの事か？」
そうして差し出したヨーダの手には、野良犬に連れ去られたユウイのポシェットがあった。泥だらけでしわしわのくまのポシェットは、今にも泣き出しそうな顔になっていた。それを見たユウイも、嬉しくて泣き出しそうになった。
「野良犬って、たぶんアンクルの事だろ」
「アンクル？　それって、くろくておおきな？」
「そう。野良犬のアンクル。とぼけた顔していつも鞄ばかり狙ってる、街じゃ結構有名な野良犬だよ」
ユウイはポシェットの中身を確認しながら、そんな野良犬の話はマーガレットから聞いていなかったなと思った。聞いていれば、ポシェットを持って行く事もなかったのに。あれ、だけどポシェットを窓から放り投げたのはマーガレットではなかっただろうか？
頭を悩ませるユウイの思考に気付いたのか分からないが、ヨーダは「マーガレットなら知らないだろうな」とユウイに言った。「なぜ？」とユウイがヨーダに問う。ヨーダは「さあな」と答えただけだった。
「さっき路地で見つけて、また誰かがアンクルにひったくられたなぁと思ってさ、子供のポシェットだし、今ごろ泣きながら探してるんじゃないかと思って」
そう言ってヨーダは伸びをし、ユウイを見た。ユウイは栗色の瞳を潤ませ、振り返ったヨーダの顔を見て驚いていた。無表情で無愛想が、ユウイの前で笑っていた。
「人の噂はあくまで噂だな。勘違いしていた、お前の事」
「なに？」
「さあ？」
くつくつと笑い出すヨーダに、ユウイの中ではもう不思議と怒りの気持ちはなかった。この子結構いい子なのかも知れない、そう思

っても口には出さず、照れ隠しにスカートの砂を払った。顔は真っ赤だった。
そのユウイの表情を見て、ヨーダがまた笑う。
「……さっきから、レディにむかってしつれいだとおもうの」
「はいはいレディね。物凄く鼻水出てますよ、お嬢さん」
完全にからかわれている。ユウイはくしゃくしゃのポシェットからティッシュを取り出すと、勢い良く鼻をかみ、さらに顔を赤く変化させた。
ユウイが鼻をこれでもかとかんでいると、後から登って来たカナタが、くぼみを登り切る手前で片手をひらひらと上げて見せていた。それに気がついたヨーダがカナタの腕を引っ張り、くぼみを登るのを手伝った。
「お前、先にこいつと塔に戻ってろよ。俺一度家に戻らないといけない用事ができた」
カナタが頷くと、ヨーダがぽんとユウイの背中を押した。ユウイがもじもじしながらカナタの服の袖を掴むと、カナタはユウイの手を袖から外し自分の手を握らせた。服の袖から覗く白い手は冷たそうに見えたが、ちゃんと温かな体温が伝わってくる。ユウイは何故だかまた泣きたくなったが、今泣くのはおかしなことだわと、思い切り鼻をすすり涙が落ちるのを堪えた。
「そいつにちゃんとついていけよ。じゃあないとずっと迷子のままだぞ」
ヨーダは預けていたネジをカナタから受け取ると、一人路地に向かい走り出した。
ユウイは慌てて走り去るヨーダの背中に向かって叫ぶ。
「ちょ、ちょっとまって！　わたし、自分のおうちにかえりたいのよ！」
「残念。このまま帰れると思ったら大間違いだ、チビ！」
振り返りそう叫ぶと、ヨーダは入り組んだ路地の中に入ってしまった。

「チビとはなにごとよ！！」と、ユウイはもうすでに路地に飲み込まれ見えなくなったヨーダに向かって叫んだ。いちいち腹の立つ事を言う奴だわと、ユウイは頬を膨らませてカナタの顔を見た。カナタはそんなユウイの顔を見て、また笑っていた。

カナタに手を引かれ、ユウイは路地とはまったくの反対方向へと歩き始める。

「これからどこへいくの……？」

不思議と不安はなかった。ただ、無言で歩き続けるのも落ち着かないので、ユウイはカナタに問う。けれどすぐにカナタが喋らない事を思いだし、やっぱりいいわと慌てて言った。訊きたい事はたくさんある。けれど、それをいちいち地面に書き記していたら時間がかかってしまう。

そう思っても、なんだか落ち着かない。そんなユウイを見て、カナタは立ち止まり、地面を見渡して小さな石を拾い砂の上に文字を書き始めた。

“大丈夫。後で、ちゃんと家まで送るから”

書き記された文字を見て、ユウイは膨れっ面をカナタに見せた。

「あなたがそうおもっていても、ヨーダはそうじゃないかもしれないわ」

それを聞いて、カナタが苦笑いをする。

“なんていうか……”

カナタが再び地面に文字を書き始める。

“ああやって、いつも相手をからかって、色々試してるみたい”

“悪い癖”と、カナタは後に付け足した。なんだかよくわからないなぁと、ユウイは難しい顔をして、カナタを見た。一体ヨーダは何を試しているのだろう。たんにからかいたいだけじゃないのかと、ユウイは思った。失礼で性格が悪いだけではないのか。

そんなユウイの考えを見通したのか、再びカナタが文字を書き始めた。

“普段は、ちゃんとやさしいんだよ”

一体彼のどこに優しさがあるのだろうかと、ユウイは思った。地面に書かれた文字を首を傾げて見つめていると、ちゃんとやさしいという言葉は、ちょっと面白いと感じた。

「あの、もうひとつ、きいてもいい？」

もじもじとためらいがちにカナタを見つめるユウイを見て、カナタがうなづく。

「かぜつかいって、まほうつかいのなかまでしょう？　ほうきにのって、いどうはしないの？」

“もしかして、疲れてる？”

ユウイが何を言いたいのか、カナタにはすぐ伝わってしまったようだった。けれどユウイは必死に首を横に振った。

「そ、そういうわけじゃないの！　そういうわけじゃ……」

真っ赤な顔でユウイは否定したが、その時、ユウイのおなかの虫が再びうなり声を上げた。

“ごめんね、ほうきにはのらないんだよ”

正直、その言葉にユウイは少しだけがっかりした。朝から走ったり、泣いたり、転んだり。疲れているし、おなかはペコペコ。もし楽に移動できるのならそうしたかった。

“そもそも、魔法使いと呼ぶには少し違うかもしれないし”

「でも、さっき、なにかとばしていたでしょう？」

ユウイの疑問に、カナタは少し考えて、また地面に文字を書き始めた。

“ほんの少しだけ、風を操ることしか出来ないから”

そして“だから”と続け、

“君の想像する魔法使いとは、言えないと思う”

と綴った。

なんだかよくわからないわと、ユウイは思った。風を操るのも魔法では無いのかしら。

でも、ユウイの想像する魔法使いといえば、とんがり帽子でほうきに乗り空を飛んだり、カエルやトカゲや葉っぱを煮込んで妙な薬

を作ってみたり、それを人に飲ませて動物にしてしまったりするものだった。そう考えてみると、違うのかな、とユウイは首をひねった。なんだか納得はできないけれど、違うんだわ。と。

「わたし、その、かぜつかい？　はじめてみたわ。この街にあなたがいること、きいてなかった」

なんでそんな面白そうなこと、ママは教えてくれなかったのだろう。ご近所のつまらない夫婦げんかの話を聞かされるより、風使いの話の方がユウイには何倍も興味がある話だ。

その事をカナタに伝えると、何やら困惑している様子だった。何かまずい事を言ってしまったかと、ユウイは慌てて話題を変える事にした。

「あの、もうひとつだけ、おしえてほしいの。あなたのなまえ、めずらしいきがするの」

名前の響きが、今まで聞いた事のないものだと、ユウイは最初に名前を聞いた時から思っていた。

カナタが地面にユウイの見た事のない文字を二つ書いた。ユウイは読めずに首を傾げてカナタを見た。

「これ、なんてよむの？　はじめてみるわ」

カナタはその隣りにも文字を書いた。「にほん？」と、ユウイがカナタに確認するように読んだ。

“この街から北西にある国。今のコウコク”

「ああ！　それなら知っているわ！」

コウコク、ユウイは何度か目にした事のある香国という字を地面に書いて見せた。香の日が目になっていたので、カナタが一本線を消した。

“香と、薫。同じ読みで二つある。あの国は今、二つに分かれてしまっているから”

へぇー、と、ユウイは感心するような返事をした。ユウイは自分の住んでいるところ以外、地理については全くと言っていいほど無知だった。学ぼうにもこの街には学校がないし、家に本があっても、

ユウイには難しすぎて読めないものばかりだった。
「えっと、おとうさんかおかあさんがコウコクの人なの？」
“多分違うと思う。父親は会った事がない人だけど、名前はトーマだし、母親はエルだし……二人とも、よそ者である事には変わりないけど”
その言葉に、ユウイは少し戸惑った。自分の書いた文字をしばらく見つめていたカナタの表情もまた、複雑そうだった。
それからユウイは、エルという名前に聞き覚えがあった。街の中心部から少し外れたところにある一軒家に、その名前と同じ人が住んでいる。ただ、面識はなかった。この街に来たばかりの時、マーガレットに連れられ、街の人達とは一通り挨拶をしているが、エルにだけは会わせてもらっていなかった。ただ、エルという女の人が住んでいるとだけ、マーガレットに教えられた。
そして、今目の前にいるこの少女に至っては、顔も名前も、その存在さえ教えてもらえなかった。こんな目立つ容姿の子は、一度でも会っていれば嫌でも忘れる事はない。
エルとカナタの二人は、親子。ユウイは街外れの一軒家の住人が、カナタの母親であるエルなのか確認しようとしたが、カナタが“行こうか”と地面に書き立ち上がってしまったので、聞けぬままユウイも立上がりカナタと砂の大地を歩き始めた。
自分の手を引き歩き始めるカナタの後ろ姿を、ユウイはぼんやりと見つめた。
話す事が出来ず地面に言葉を記すカナタ。人と話す事が上手く出来ない自分。重ね合わせて、なんだか急に恥ずかしさが込み上げてきた。地面に文字を書き記す行為に、ユウイは少し煩わしさを感じた。どこかめんどくさいと感じてしまった。結局自分も街の人達と同じだわと、そう思うと酷く恥ずかしく、また悲しくなった。
カナタは自分の話を、ちゃんと聞こうとしてくれたのに。
ユウイは立ち止まり瞼を擦った。何度拭っても、涙がこぼれて止まらなかった。

カナタが心配そうにユウイを見つめ、自分の服の袖でユウイの涙を拭った。
「おしえて」
ユウイの言葉に、カナタの手が止まる。
「わたし、わたしも、ヨーダみたいに、あなたのいうことかかなくてもわかるようになるわ。ううん、書いてもいいの、ただ」
深呼吸して、ユウイはカナタを見た。
「あなたとおともだちになりたい。だから、ちゃんとあなたとおはなしできるようになりたいの」
カナタが、じっとユウイの顔を見つめる。
しばらくすると、カナタは頷きユウイの頭を優しく撫でた。ユウイの瞳から、涙が溢れ出る。
誰かに傷つけられたり、痛みを感じるのは自分だけだと、なれない場所で何も上手くいかない事への苛立ちから、どこか勘違いをしていたのかもしれない。その事に、今逆の立場になって気付いた。
気付いたのなら、少しづつでもいいから、変わっていきたい。
「ごめんなさい。ありがとう」
ユウイの言葉に、カナタはただ優しく笑っていた。その笑顔が、すべてを理解し受け止めてくれているように感じた。
言葉の伝え方に差なんて無くて、受け取る側の気持ちしだいだったりするのかしら。
暗く、細く入り組んだ路地を抜けると、太陽の光が降り注いだ。周りの景色が休息に色付くのをユウイは感じた。今までまともにこの街の風景を見る事なんてなかった。
もう廃墟の群れも怖さを感じない。
廃墟の隅で咲き乱れるピンク色の小さな花が目に止まった。風に揺れるそれが、とても可愛らしく感じた。
今まで色々なものを見逃してきたのかもしれないと、ユウイは思った。

†

廃墟を抜けてしばらく草むらを歩くと、目の前に煉瓦造りの小さな塔が見えた。ユウイは立ち止まり、カナタを見上げた。

「ここに、ごようがあるの？」

ユウイがそう訊くと、カナタが頷いた。

「お前らさぁ、何で一度家に帰った俺より遅いんだよ」

声のした方へ目をやると、塔の左手に立つ木の下に、ヨーダが腕組みをして立っていた。「のんびり歩いてんなよなー」と呆れ顔でカナタに言うと、ヨーダは服の襟から手を突っ込み銀色の古びた鍵を取り出した。

「あの……わたしどうすればいいの？　ちゃんとおうちにかえれるの？」

ヨーダが扉の鍵を開ける手を止め、振り返りユウイを見た。ユウイにはいまいちここに連れてこられた理由が分からないし、こんな街の外れまで来たのも初めてだったので、不安もあった。

「ああ。お前はあの場所でこいつに会った事と、ここに来た事を誰にも言わなければそれでいい。家にもちゃんと帰してやるよ」

ヨーダの言葉に、ユウイは訝しげに眉を顰め唇を尖らせて見せた。

「何だよその顔笑わせたいのかよ」と、ヨーダもまた眉を顰めてユウイの顔を見ていた。

「それだけ？　ほんとうはゆうかいしようとしているとかじゃなくて？」

「お前誘拐して何が楽しいんだよ。そんな心配事、誘拐されるくらい魅力的になってから言ってください鼻たれお嬢さん」

「鼻垂らすくらい若いうちからいらない心配事すんな、チビ」。

そこまで言われたユウイは「むっかー！！」と顔を真っ赤にし頬を膨らませ抗議した。「いちいち笑わせなくていいから」と、ユウイを適当にあしらいながらヨーダは扉の鍵を開け始めた。
「だいたい、それだけって言うけどお前守れるのかよ」
開かれた扉の前で、ヨーダが再びユウイに問うた。ユウイは塔の中が気になり、背伸びをして中を覗こうとしたが、それをヨーダに阻まれてしまった。
「だれにもいわないわ。いいふらすあいてがいないっていったのはあなたじゃない。でも、どうしていってはいけないの？」
「言う必要がないから。それだけ」
「ええ？」
それって答えになってないんじゃあないの？　訳が分からずユウイは首を捻った。助けを求めるようにカナタを見ると、カナタも人差し指を口に当て、笑っただけだった。
「ないしょのことなら、なんでここにわたしをつれてきたの？　りゆうがないわ？」
困惑顔でもじもじと二人を見るユウイに、ヨーダが紙袋を一つ差し出した。ユウイはそれをそっと受け取り、おそるおそる中を覗き込む。すると中からふわりと甘い香りが溢れ、ユウイの顔の周りに広がった。
「腹減ってんだろ？　食っていけば？」
中には柔らかそうな白パンと、甘い香りの元になっているであろう木の実の詰まったパンが入っていた。ユウイは思わず顔を緩ませたが、すぐに首をぶんぶんと振り、袋とヨーダを交互に見やると再び訝しげで唇を尖らせる表情を見せた。
「どく」
「入ってねーよ。返せクソガキ」
ユウイは袋を抱えカナタを見た。すると二人のやり取りを見ていたカナタは口元を押さえ、くすくすと笑っていた。
「まったく野垂れ死にされたら迷惑だから持って来たのに。あんな

腹の虫聞いた事ねーよ」
ヨーダが不機嫌そうにユウイの背を押し、ユウイを塔の中に招き入れた。
ぐいぐいと背中を押され塔の中へ入っていくと、目の前に細い階段が現れた。先にカナタがその階段を駆け上がっていく。
「ここって、いったいなにをするところなの？」
残されたユウイはヨーダに手を引かれ、薄暗い階段を上がり始めた。ヨーダは特に何も答えず、ユウイも何か文句を言われたらいやだなぁと、それ以上何も訊かなかった。途中いくつか扉を見たが、すべて外側から鍵が掛かっていた。
薄暗い階段を上りきると、今度は鍵の付いていない扉が見えた。その隙間からわずかに光が漏れている。
「入るぞ」と扉に声を掛けて、ヨーダが扉を勢いよく蹴り上げた。扉は鈍い音を立て、ゆっくりと開き始めた。
ユウイが恐る恐る中を覗くと、奥でカナタが大量の本を抱えて立っていた。その肩には、ちょこんと小さな鳥が乗っている。右から左へ、左から右へと、カナタの肩の上を行ったり来たりしていた。
『いつも言ってるけど、足で開けるのやめてよね』
突然、ノイズ混じりのラジオの音声がユウイの耳に入った。ユウイはその声に驚き、キョロキョロと部屋の中を見渡した。
「両手がふさがってましてね」
ヨーダはそのノイズ音をまるで気にしていない様子だった。部屋に入り、自分の足下にある本を広い上げ窓側のテーブルに置くと、椅子の上に積み重なれた本を見て「そっちこそ、読んだらちゃんとしまえよ」と本の片付けを始めた。
『まったくもう……』というノイズ音声とともに、カナタの左肩の上で小鳥が胸を膨らませたのを、ユウイは見逃さなかった。よく見れば、カナタの肩の上を行ったり来たりしていた小鳥が、カナタの口の動きに合わせて動いている。
自分に向けられる痛いほどの視線に気がついたのか、カナタが『

どうしたの？』とユウイに声をかけてきた。
「なんだか、あってないとおもうの、それ……」
「すっごいイワカン」と、ユウイは怪訝な顔をカナタに見せた。
その表情を見たカナタとヨーダが、顔を見合わせて笑い始めた。
「まぁ……本当の声じゃないし、合ってないってのは当然だよな」
ヨーダは片付けた椅子に座ると、テーブルの上の本の中から一冊手に取りパラパラとめくり始めた。
本当の声じゃないって、どういうことだろう？　ユウイは横で本を読んでいるヨーダにそのことを訊こうとしたが、もしかするとそれを訊くのは失礼になるかもしれないと思い、口をもごもごさせながらテーブルの上の積み重なった本を眺めた。カナタはというと、いつのまにか姿が見えなくなっていた。
積み重なった本の背表紙を上から順番に眺めると、一番下の本とテーブルのあいだに、紙が一枚挟まっているのが見えた。隙間からはみ出した部分には、小さくｐｉｐｗｉｓｈと書かれている。ユウイがなんとなくその紙を引っ張ると、積み重なった本がぐらりと揺れ、テーブルの上で雪崩を起こした。
「……なにやってんだよ」
ヨーダが読んでいた本を自分の座っていた椅子に置き、テーブルの上の雪崩を片付け始めた。ユウイも「ごめんなさい……」と謝りながら、テーブルの上は危ないからとヨーダに言われ、床に本を積み重ねていった。
最後の一冊を床の上に置くと、雪崩の下敷きになっていた紙が顔を出した。ユウイはそれを手に取り、首をかしげる。最初に見たｐｉｐｗｉｓｈの文字以外、ユウイには読むことができなかった。
首をかしげたまま紙を眺めているユウイに気付いたヨーダが、ひょいとユウイの手から紙を取り上げた。
「その辺に落ちてるの、勝手に読むなよ」
ユウイはコクリと頷くと、再び椅子に座りきょろきょろと辺りを見渡した。どこを見ても本の山。さすがに暖炉の中にまで本が詰ま

っているのには驚いた。
「あれ、さむくなったらどうするのかしら」
再び本を読み始めようとしていたヨーダに、ユウイが暖炉を指差し問うと、呆れ顔でヨーダが答えた。
「着込むんじゃねーの？」
そう言うと、ヨーダは視線を本へと戻した。ユウイが落ち着きなくもじもじとしていると、ヨーダが視線を本に落としたままテーブルの上の紙袋を指差した。先ほどもらった、パンの入った紙袋だ。
紙袋を掴んで引き寄せると、まだほかほかと温かかった。袋を開けば、またふわふわと甘い香りが広がる。ユウイがその甘く香ばしい空気の中に浸っていると、バタバタと慌ただしくカナタが部屋に戻って来た。
紅茶の缶とティーポットを乗せたトレーをテーブルの上に置くと、カナタは部屋の中をぐるぐると周り始めた。どうしたのだろうかとユウイがカナタを見ると、カナタの肩の上の小鳥が、ぴくぴくと痙攣し白目を向いていた。うわぁ……やっぱりあの鳥さん、好きになれないわとユウイ思った。
「そこ。窓際」
溜め息をつきながら、ヨーダが自分の背後にある窓際の棚の上を指差した。ユウイがヨーダの背後を覗き込むと、小さな鳥籠と、その中に金色の卵が入っているのが見えた。
カナタがテーブルの上に乗る勢いでその鳥籠を掴んだ。そうして中の卵を取り出すと、それをテーブルの上にコツコツと当て始めた。
「充電はちゃんとしておけよ」と、ヨーダがポットの中に紅茶の葉を入れながら言った。
カナタが数回卵をテーブルに叩きつけると、カチリと音がして、金色の卵がギザギザの亀裂を入れ割れた。その中にぐったりとしている小鳥を入れると、カナタは殻を合わせ閉じ、鳥籠の中にそれを納めた。
やれやれと額の汗を拭う仕草をして、カナタは次にテーブルの下

に潜った。今度は何かしらとユウイがテーブルの下を覗き込もうとすると同時に、カナタが大きなスケッチブックを手にして出て来た。
“朝充電したのに切れたの。まるでヨーダみたいにね”
スケッチブックに付いていた羽ペンを握ると、カナタは筆記体ですばやく文字を綴り、ヨーダに見せた。ヨーダの眉間に深いシワが刻まれる。ユウイは筆記体を解読するのに手間取ってしまい、書かれていることを理解するのが一拍遅れてしまっていた。
「朝置いた卵どこに行ったか覚えてねーとか、お前はあれか、すでにボケが始まってんだな」
「うちのじいさんより、ずいぶん早いボケだな」。ヨーダは乱暴に紅茶をカップに注ぐと、ユウイにそのカップを突き出した。それを黙って受け取り、ユウイはなみなみと注がれた紅茶を啜りながら、二人の様子を窺っていた。
“コルトさんはボケてないでしょう？　むしろヨーダの怒りっぽいところの方が問題だよ”
そうスケッチブックに書き込み見せると、再び羽ペンを手に取り、カナタは何やら文字を綴った。その文字は明らかに英語では無かったので、ユウイには何が書いてあるか分からなかったが、ヨーダには理解出来た様子で、カナタからスケッチブックを奪うと、その角でカナタの頭を叩いた。
「よけいな単語まで覚えてんなよ！　この馬鹿！！」
「大体片付けた端から散らかしてんじゃねーよ！」と言いながら、ヨーダが何度もカナタの頭にスケッチブックの角をぶつけるので、さすがにユウイもカナタが心配になり、なんとなくテーブルの上のトレーをカナタに渡した。カナタがそのトレーを頭に乗せ防御する。ユウイはヨーダの女の子に対する攻撃の遠慮無さに驚いていた。
カナタがトレーで防御しながら、ヨーダからスケッチブックを取り返した。
“置き場がないんだから仕方がないでしょう！？　半分はヨーダの物なんだからね！！”

「半分じゃねーよ、七分の三くらいだ」
“それほぼ半分でしょう！？”
使っていたスケッチブックで、今度はカナタがヨーダの顔を叩いた。カナタはそれで気がすんだのか、椅子に座りヨーダの入れた紅茶を飲み干した。「それ俺のだよ！！」と、ヨーダが鼻を擦りながらカナタを睨み付けると、カナタはヨーダに思いきり舌を出して見せた。
そんな二人を眺めながら、ユウイは口いっぱいにパンを詰め込んで、ふくれっ面を作っていた。カナタがそんなユウイの顔に気付き、笑う。「どさくさに紛れて何やってんの」と、ヨーダもユウイの顔を、呆れ顔で見て、笑った。
「このパン、おいしいね」
ほおばったパンを飲み込んで、ユウイは言った。ヨーダが少しばつの悪そうな顔をして、新しく注いだ紅茶のカップに口を付けた。
「当たり前だろ。誰が焼いてると……」
“焼くのは焼き窯だよねぇ？”
ヨーダに見えないように、カナタがぼこぼこになったスケッチブックに書いてユウイに見せた。ヨーダが気配を察知し、カナタを見たが、カナタはすでに次のページをめくっていた。
“食べたこと、なかったの？　お店に行ったことはある？”
カナタはヨーダの視線を無視して、ユウイに再びスケッチブックを向けた。
「このまちにきたばかりのとき、あいさつに、おみせにいったわ。でも、かったものはママがおともだちのところにもっていったの」
「それに……」と、ユウイはヨーダをちらりと見て、もじもじと下を向いた。
「なんだよ……」
“でもそれ以来、お店に近付けなかったんだよね？”
本人を目の前にして言うのは、とても気が引ける。遠慮がちに頷くユウイをみたカナタが、苦笑いする。

“ほら、だからいつも言ってるのに。接客に笑顔は必要だよ”
カナタがそうスケッチブックに書いてヨーダに見せると、ヨーダは不機嫌そうに顔をしかめた。
「……おみせ、たのしくないの？」
あんなに美味しそうなパンがいくつも並べられていて、良い香りがするお店なのに。私だったら、あの場所で店番させてもらえるのなら、嬉しくて自然に笑みが零れてしまう。そうユウイは思いヨーダに訊いた。
「べつに。それより、お前の話」
飲んでいた紅茶のカップをテーブルに置くと、ヨーダがユウイに言った。ぎくり、とユウイの身が強張った。
「わたしのはなし……？」
「そう。場合によっては、色々報告しなくちゃいけないから」
報告？　一体誰に？
ユウイの顔が緊張からますます強張った。やっぱりこの子、食べ物で油断させて、最後には自分をどこかに売る気なんだわ。そう考えると、ユウイの目にじわりと涙が滲んだ。
ふくれっ面で俯き、涙を目に溜めて今にも泣き出しそうなユウイを見て、カナタがユウイの肩にそっと手を置いた。顔を上げると、目の前のテーブルにスケッチブックが置いてあった。そこには何やら頭がつるつるで髭がもじゃもじゃの、サンタクロースのような絵が描かれていた。そしてそのサンタクロースの横に、大きな吹き出しがあり、そこに“私は怖くありませんよ”と大きな字で書いてあった。
「おまえまた微妙な絵を描くなよ。うちのじいさんサンタクロースじゃねーし、クリスマス当分先だし、そんな喋り方しねーし」
うちのじいさん？　ユウイは首を傾げ、しばらく考えると、頭の上で豆電球をパッと光らせた。つるつる頭で髭の、今日カルペディエムで店番をしていた、あのおじいさん。
けれどどうしてあのおじいさんに報告しなければならないのだろ

うか。あのおじいさんは優しい顔をして、実は怖い絵本に出て来る、地獄の番人のような人なのだろうか。
「報告するのはうちのじいさんだけ。あとのクソじじい達には黙っとくから、どうやって“爪痕”まで入ったのか教えろ」
「……あとのくそじじい……？」
「……おまえ、クソじじい集団のこともまだ何も知らないんだな。まぁいいや。つるつるしてんのがあと六人いるんだよ。老いぼれのことは置いといて、どうやって爪痕まで入ったのか教えろ」
ヨーダは腕と足を組みユウイに訊いた。教えろ、と言われても、ユウイは野良犬のアンクルにさらわれたクマのポシェットを追いかけて路地を迷子になったわけで、来た道を正しく覚えているわけでもなかった。返答に困ったユウイは目を泳がせ、唇を尖らせ言葉を探したが、どうすれば良いのかわからず再び泣き出しそうになってしまった。
「……おまえ、アンクルを追いかけてここまで来ただけか？」
ヨーダの問いに、こくり、とユウイが頷くと、ヨーダは何かを考えるように息を吐き、カナタを見た。カナタもなにやら深刻そうな顔をしていたので、ユウイはますます不安になり、俯いた。
「別に、わからないならそれでいい。じいさんにはアンクルに連れてこられたって報告するから。ただ……」
不安な気持ちといっしょに溜めた涙をこらえてヨーダの顔を見ると、ヨーダはカナタをちらりと見やり、溜め息混じりに続けた。
「ここに来るのは今日一回限り。二度と来るなよ。それ食べたら送るから帰れ」
ユウイの目から一瞬涙が引き、再び眩むように滲んだ。
「どうして？　どうしてきてはいけないの？」
せっかくお友達になってくれそうな子に出会ったのに。ユウイはぐっと涙を堪えながら、ヨーダに言った。
「元々ここには誰も入ってはいけないことになってる。というか、入れないようになってんだ。おまえが今ここにいることが本当なら

ありえないんだよ」
　自分がここにいることがありえない？　そう言われても、ユウイは何か特別な事をしたわけではない。アンクルを追いかけて来ただけなのだから。そもそも何故ここへ来てはいけない事になっているのだろう？
「なんで、ここに、つめあとにきてはいけないの？」
　ユウイがそう訊いても、二人は何も答えなかった。
「おともだち、なってくれないの……？」
　どうすることもできなくて、ユウイは不安げにカナタの顔を見た。カナタはしばらく何かを考えて、ユウイの頭に手を乗せ撫でると、部屋から出て行ってしまった。その行動がお別れを意味しているかのように感じられて、ユウイはとても寂しかった。
「あんまり長居されても困る。それ食ったら行くぞ」
「わたし、かえらない」
　ユウイはスカートをぎゅっと握り締めながら、しぼりだすようヨーダに言った。ここで帰ってしまっては、この先もずっと友達なんて出来ないような気がした。
「わたし、かえらない。ママとのやくそくだもん。おともだち、なるまで、かえらない」
　ユウイはヨーダを真っ直ぐ見据えた。ぼろぼろと涙をこぼしながら、鼻をすすり、スカートを握り締めて。そんなユウイをヨーダも見据えて、視線を外さなかった。
　深い蒼の瞳が、じっとユウイを見つめる。油断すると水底に引きずりこまれそうなその瞳はとても怖かったが、ユウイには同時に大地を包み込む空の色にも見えたので、その目を逸らす事はしなかった。
「……ママとのおやくそくね。友達作らないと家に入れてもらえないとか、そんなとこだろ」
　ヨーダが呆れ顔で溜め息をついた。そして、ユウイにティッシュを差し出してきた。ユウイはふん、と鼻を鳴らすと、済まし顔を作

りながらティッシュを受け取った。
「そういう理由なら、なおさら駄目だな。マーガレットのいう”友達”の中に、あいつは含まれていない」
「え？」
ユウイは鼻をかむ手を止め、ヨーダを見た。
「言葉の通りだよ。あいつを友達にしても、おまえの母親は認めないと思うよ」
ヨーダの言っている意味が理解出来ず、ユウイは首をかしげた。そこへ、先ほど部屋を出ていったカナタが戻って来た。その腕には本が数冊抱えられていた。
カナタが、持って来た本をユウイの前に差し出した。持って来た本の数は三冊。一番上に重ねられた本の表紙を覗いてみたが、ユウイにその本の題名は読めなかった。
「……ちょっと待った。お前、その本こいつにやる気？」
ヨーダが困ったように額に手を当てながら、カナタに言った。カナタは大きく頷くと、先ほどよりもさらにユウイの前に本を差し出して来た。ユウイがそれを受け取ろうとすると、そこにヨーダの手が割って入った。
「無責任。また会える保証なんて無いし、会わせる気も無いよ、俺は」
そう言うと、ヨーダはカナタが持って来た本をひょいと取り上げた。本はカナタの頭上高く上げられ、そのままヨーダの後ろ手に隠されてしまった。
「なに？　なんのごほんなの？」
ユウイは本の内容が気になって仕方が無かった。一体カナタは自分に何の本を渡そうとしたのだろう。
「関係ない。もういいだろ、帰るぞ」
ヨーダが足下に積み重なれた本を跨ぎながら、部屋の扉に向かう。ユウイはその場を動こうとしなかった。
ユウイにはヨーダが悪魔に見えた。せっかくお友達が出来ると思

ったのに、ことごとくそれを邪魔するのだ。
ヨーダが溜め息をつき、眉間に皺を寄せた。ユウイはそれをみても怯まなかった。ユウイとヨーダが睨み合う。カナタがそんな二人の間でおろおろとしていた。
「おいガキ、いいかげんにしろよ」
「ガキじゃないもん。ぜったいおともだちになってもらうんだから、それまでかえらない」
「おまえの都合なんてどうでもいいんだよ。早くしないとターニャも帰って来る。そうしたらおまえ、他のじじいにも今日の事報告されて、この街追い出されるぞ」
「ターニャ？」。ユウイはまた聞き慣れない名前が出てきたので首をかしげた。「あー……こいつターニャもしらないのか」と、ヨーダは苛立つように頭を掻いた。
「ターニャなんてしらないわ。ママがおしえてくれないもん」
「ママにばっかり頼ってないで、少しは自分から知ろうとしてみろよクソガキ。だったらお友達もママに探してもらえよ。自分で探せないんだから。逃げ出してばかりの鼻たれ少女」
ユウイの顔が、破裂しそうになるまで膨らんだ。
「おともだちみつけたのに、あなたがじゃましているんじゃない！！　わたし、もうにげないもん！！　おともだち、これからたくさんつくるんだから！！」
「言ったな鼻たれ。だったら友達作って見せにこいよ。そうしたらカナと友達になってもいいぞ。認めてやる。まぁ無理だろうけどな」
「そんなの、かんたんなのよ！！」
ユウイはこれまでないくらいに頬を膨らませ、真っ赤な顔でヨーダに言い放った。ヨーダはそんなユウイを見てか、にやりと笑い、カナタを見た。カナタはユウイの勢いに、呆気にとられてしまっているようだった。
「じゃあ一週間後。友達作って連れてこいよ。そうだな、ただ普通に連れて来られても面白くない。七人の主の孫でも、連れて来ても

らおうか」
「しちにんのあるじ？」
「そう。さっき言ったつるつる頭のじじい集団。その孫と友達になって連れて来い。全員は無理だから、一人で良い。俺を抜いて、カルエル、トエル、ミシェル、キャロル、フィフィエル、ラスフェル。そのうちの誰か一人でも連れて来られたら、じじい集団も文句は言えないだろうから」
ヨーダの意図がどういう事かわからなかったが、ユウイは大きく頷き、そしてカナタを見た。絶対に、この悪魔の魔の手からカナタを取り戻すんだから！　ユウイは心配そうに二人の様子を見つめるカナタに、心の中でそう叫んだ。

帰り道、ユウイはヨーダに連れられ、砂の大地を歩き、路地裏を抜けた。その帰路が、なんとも不思議なものだった。一度通った道を何度も通ってみたり、来た道を引き返したり。まるでわざと来た道を分からなくしているみたいで、ユウイはヨーダの意地悪だと思い腹が立ってしょうがなかった。道を覚えようと思っていたのに、これじゃあ覚えられないじゃない！　ユウイは帰路につく間、ヨーダと一言も口を利かなかった。
路地裏を抜けて、見慣れた大通りに出る。ユウイは、ここからは一人で帰れるとばかりにヨーダの前をずんずん歩き始めた。そしてちょうどカルペディエムの前に差し掛かったところで、買い物帰りのマーガレットに会った。
「あら、ユウイ、どこにいってたの？」
マーガレットの問いに、ユウイはとっさにどう答えたら良いのかわからなかった。すると背後から「散歩、してました」と声がした。振り向くと、真後ろにヨーダが立っていた。
「散歩？　ヨーダ君と？　良かったわねユウイ」
よくなんてないわ！　とっさにそう叫びそうになったが、ぐっと堪えてユウイはマーガレットに頷いた。

「それじゃあ、俺はこのへんで」
そういうと、ヨーダは店の中に入って行ってしまった。ユウイはマーガレットに見えないよう、閉められた扉に向かい思いっきり舌を出した。
「……意外な組み合わせねぇ」
ユウイが舌を引っ込め振り向くと、マーガレットが不思議そうにカルペディエムの扉を見つめていた。
「あんた七の主の孫……というか、あの蒼い目、怖くないの？」
「あおいめ？」
「そう。七の主の孫ってのもあるかもしれないけど、あの子のあの目、みんな怖がって目を合わせないのよ。おかしな話だけど」
ユウイは扉を振り返る。みんな怖がって目を合わせない？　それが本当のことなら、ひどく寂しいことではないだろうか？
「なんでこわいの？」
「さぁ。なんででしょうねぇ？　それはママにもわからないわ」
「ママはこわいの？」
「ママは怖くない。というか、慣れてるのよ。あの子のお父さんが同じような瞳の色していたから。あの子のお父さん、スピカ山脈の向こう側の少数民族で、あの子と同じ黒い髪で蒼い目してた」
マーガレットは扉を見つめながら、ほんの少し寂しそうな顔を見せた。
「アルト民族、あの黒髪と蒼い目が一部で嫌われていてね、この街にもまだ差別的な目で見る人がいるけど……ユウイは平気なのね」
ふぅん……。ユウイはマーガレットの話を聞きながら、扉を見つめ、扉のガラスに映る空を見ながら、言った。
「うみと、そらのいろだわ。こわくなんてないもん。きっと、こわがりさんなのね、みんな」
あの悪魔にはもったいないくらいの、綺麗な蒼い瞳。確かに性格は悪いし失礼なやつだけど、ユウイには差別がどういうものかわからなかったし、する気も起きない。ただみんなから目を逸らされる

自分を想像してみると、なんだか胸の奥がちくちくと痛んだ。

†

次の日の朝、ユウイはいつもより早起きして、街に出ることにした。

朝食を久し振りにマーガレットと食べた。そこでユウイは、七人の主について訊こうと思っていたからだ。

「七の主はね、そうね、簡単に言えば、この街を治めている人達ね」

「それって、おうさまみたいなひと？」

ユウイがそうマーガレットに問うと、マーガレットはスープを口に運ぶ手を止め、怪訝な表情で舌を出した。

「ホント、態度だけは王様よ。王様気取り。それが七人も。迷惑以外の何者でもないわ」

「あ、でも」と、マーガレットはスプーンでスープをかき混ぜながら続けた。

「カルペディエムのコルトさん。あの人は違うわね。あの人は後から七の主になったから、他の六人とはちょっと違うわ。他はもう駄目、元々軍人だったのに、何故か街を仕切り始めて、今じゃ自分達のこと王族か何かと勘違いしているから……街の人達も、何故か七の主と孫には逆らわないし」

「この街は、ちょっとおかしいのよ」。そう言うとマーガレットはスープを飲み干し、自分の食器を片付け始めた。

「ママは？」

ユウイはテーブルを拭くマーガレットに問う。マーガレット自身

も、七の主には逆らわない、逆らえないのだろうか。
「……そうね、時と場合によるかしら。波風立てて街の人困らせたくないし。めんどくさい事はごめんだわ」
「ずるい答え方ね」。テーブルを拭く手を止め、マーガレットが言った。ユウイはぶんぶんと首を振り、スープの入ったカップを見つめた。七の主というのは、なんだかとても厄介なものらしい。その孫と友達になれだなんて、やっぱりヨーダは意地悪だ。
「で、ユウイは今日どうするの？　またヨーダ君に遊んでもらうのかしら？」
「えっ？」
一瞬何を言われたのかわからず、ユウイは目をぱちくりさせマーガレットを見た。マーガレットはニコニコと嬉しそうにユウイを見つめている。
「うん、そう……あそんでもらう、の」
本当なら遊んでもらうなんて口が裂けても言いたくなかったが、これから友達を作るために友達を作らなければいけないなんてこと、よく考えればおかしくて、マーガレットに言ったら怪しまれるだろう。ユウイは怪しまれないように笑顔を作りながら、マーガレットにそう言うしかなかった。
朝食をすませ、マーガレットに見送られながら大通りに出ると、ユウイはポシェットから一枚紙を取り出した。そこには、七人の孫達の名前が書いてあった。昨日塔から出るとき、ヨーダに書いてもらったものだった。
きょろきょろと大通りを見渡し、カルペディエムを見つけると、ユウイは店に向かっておもいきり舌を出した。気が済むまで舌を出し続け、ふん、と鼻を鳴らすと、唇を尖らせ名前の書いてある紙を見つめた。一番上に書いてある、カルエルという名前。その名前だけ、横に地図が書いてあった。他は全員街の東にある、小さなお城のような建物の中にいるとヨーダは言った。ユウイはまず、地図のあるカルエルという人物の家に向かう事にした。

地図には、大通りの噴水広場を左に曲がると、煉瓦の坂道があり、それを登りきると大きな庭園のあるお屋敷があると描いてあった。ユウイはまず噴水広場に向かい、坂道を登り始めた。

坂道を登っていると、途中甘い香りが鼻先をくすぐった。何の香りかしら？　と辺りを見渡してみるが、甘い香りのもとは見つからない。そのまま坂道を登りきると、ユウイの前に、大きな門が立ちはだかった。

門の前には、大きな槍を持った、大きな体の門番が立っていた。ユウイはおそるおそる門番に近付き、彼を見上げた。門番は微動だにせず、自分にまったく気がついていないように見えた。

「あの、カルエルさんのおうちは、ここですか？」

ユウイはちっとも自分の事を見ない門番にそう尋ねた。門番はユウイの問いには答えず、ただ真っ直ぐ坂道を見据えていた。

「あの、ごようがあるの、カルエルさん、いますか？」

ユウイはもう一度門番に尋ねた。変わらず、返答は無い。

そこに、ふわりと先程の甘い香りが漂ってきた。ユウイは門の先をみつめ、中の庭園に気がついた。小さな白い花がゆらゆらと風に揺れるたび、甘い香りが届けられる。ユウイはその香りに惹かれ、門に一歩近付いた。すると門番がユウイの前に大きな槍を振り下ろした。

「お嬢様はご体調を崩されお休みになっておられる」

ユウイは驚き、よろけて尻餅をついた。門番が自分に槍を向け見下ろしている。ユウイは慌てて立ち上がると、ぺこりと頭を下げて逃げるように門を後にした。

「こわいの……もんばんさんこわい……」

坂道を降りながら、ユウイは振り返り門を見た。門番がこちらをじっと見据えている。お尻に付いた砂埃を払い、ユウイは溜め息をつく。もう一度門番のもとにいこうかとも考えていたが、カルエルの具合が本当に悪いのなら、無理に会おうとするのは失礼かもしれないと思った。

ユウイはずっと握り締めてしわくちゃになった紙を広げ、残りの六人の名前をみつめた。ヨーダはともかくとして、残り五人もいるのだ。きっと自分と友達になってくれる人がいるに違いない。
坂道を降り終え、ユウイは噴水の縁に座り大きく伸びをした。そして目に入った青空を見て、絶対に負けないんだから！　と小さく呟いた。

噴水で一休みした後、ユウイは次に街の東にあるという、小さなお城のような建物に向かった。
その建物までの道程は遠くはなく、大通りを東に真っ直ぐ進めば良いだけだった。ユウイは今まで大通りの東へ行った事がなかったので、期待と不安でいっぱいになりながら前へと進んだ。
大通りの東は全くと言っていいほど人通りが無かった。ユウイは途中、本当にこの道で合っているのか不安になったが、中程まで来たところで、てっぺんにとんがり帽子をかぶせたような建物の頭が見えたので、それが城だろうと考えそのまま進む事にした。
お城の近くまで来て、ユウイはお城の前の建物の壁際に隠れるようにして立ち止まった。お城の前には、大きな槍を持った黒ずくめの人物が二人立っていた。きっとまた門番さんだわ、と、ユウイは壁際に隠れながらどうしようかと悩んだ。普通に行ってもまた追い返されるのでは？　でもこそこそ隠れて入ったら、どろぼうさんみたいだわ。ユウイは悩んだ結果、勇気を出して門番の元へ向かう事にした。
「あの、しちにんのあるじのおまごさんいますか？」
背の高い門番の足下で、ユウイは門番を見上げ言った。門番は黒のローブを目深にかぶっているが、無言でユウイが今通って来た道を見据えているように見えた。
「あの、ごようがあるの。おまごさんたち、ここにいますか？」
ユウイが再び問うと、向かって右側の門番がローブの下から少しだけ覗く口許を少しだけ動かした。

「お会いするには許可がいる。許可証はあるか」
「きょか、しょう？」
ユウイは唇を尖らせ、首を傾げて門番を見上げた。そんな話、ヨーダから聞いていない。ユウイが焦っていると、無いのなら帰れと黒ずくめの門番は槍でユウイの来た道を指し示した。
「あの、まって、きょかしょ、だれにもらえばいいですか？」
「主、またはお嬢様方のサインが必要。それ以外は認められていない」
そう言って門番は再び無言で大通りを見据えた。
お城に入るには、サインが必要。
サインが必要な相手は、お城の中にいる。
ユウイはなぞなぞのようなこの状況に、困り果て小さなお城を見上げた。

†

「で、どうすることもできないで、ここに来たわけか」
カルペディエムのレジの前で、ヨーダが何やら裁縫をしながら言った。
「だって、きょかがいるなんて、きいてないわ！　どういうことなのよ！」
店内にあるテーブルで、昼食に買った白パンを頬張りながら、ユウイはヨーダに抗議した。
小さなお城の前で、ユウイは許可がなくてもどうにかならないの

かと門番に尋ねたが、門番はユウイの話を聞いているのかいないのか大通りを見据えているばかりで何も答えてはくれなかった。その後城の中から七人の主か孫の誰かが出てこないか待ち続けてみたものの、何時間待っても城からは誰も出てはこず、途方に暮れているところでおなかが鳴り、カルペディエムにやってきたというわけだった。

「どういうわけもなにも、てっきりマーガレットに聞いてると思ったから。俺何も訊かれてないし」

「むっかー！！」

ユウイはパンを購入した時にヨーダに入れてもらった紅茶を勢いよく飲み干した。そして白パンの最後の一口を頬張り飲み込むと、ずんずんとレジの前に行き、無言で紅茶のカップをヨーダに返した。

「帰るのか鼻たれ。昼飯食いに来ただけじゃないんだろ」

ずんずんと店のドアの前まで歩いて行き、ドアノブに手を掛けたところでヨーダに呼び止められる。ユウイは頬を膨らませたまま振り向き、ヨーダを睨んだ。

「残念だけど、俺許可出さないよ。あいつとおまえが友達になるの反対だから」

ヨーダは裁縫の手を止めず、睨み付けるユウイの方をちらりとも見ないでそういった。ユウイはまったく相手にされていないことに腹を立て、抗議の顔を見せようとずんずんレジの前まで歩いて行き、ふとヨーダの手元を見て止まった。

「それ、だれの？」

ヨーダの手元には、白の生地に色とりどりのビーズがちりばめられた服があった。袖には今ヨーダが縫い付けたレースが揺れている。あまり見掛けない服の形に、ユウイは首を傾げヨーダに問うた。

「元々俺の父親の服。で、今はカナの」

ヨーダは大きく伸びをすると、レジのカウンターの上にその服を置いた。ヨーダのお父さんの、ということは、アルト民族の衣装ということだろうか。きっとそれを女の子用にしているのね。きらき

ら光るビーズと真っ白なレースがとても綺麗で、きっとカナタによく似合うだろうとユウイは思った。
「そろそろ諦める気になっただろ。普通に友達作った方がいいだろ」
カウンターに肘をつき、ヨーダがユウイを見下ろした。ユウイも負けじと背伸びをして、頬を膨らませヨーダを睨んだ。
「カナタは、きょうはどこにいるの？」
「どこって、塔だろ」
「ほんとに？　このおみせにはこないの？」
「来ないよ。街には来ない。来れないんだよ」
来れない？　来れないとは、どういうことだろう。
ユウイがそれを問う前に、ヨーダが口を開いた。
「あいつは嫌われてんだ。街の嫌われ者。だから街の外れに追いやられている。あいつは路地を抜けられないし、街の住人も路地を抜けられない。そういう風にできてんだ。なのに」
「おまえは何故かあの路地裏を抜けてしまったんだ」と、ヨーダは不思議そうにユウイの顔を見て、ユウイの鼻を人差し指でつついた。ユウイはまたぷうっと頬を膨らませて、ヨーダを睨む。
「きらわれているって、どういうこと？　あんなにかわいくて、しろくてきらきらしてて、おひめさまみたいなのに」
「……女って好きだよなぁ……ああいうの」
呆れたように溜め息を落とすヨーダに、ユウイは恥ずかしくなり顔を赤く染めた。
「なによ、じぶんだって、めんくいさんなんじゃない？　きらわれてるだなんて、ほんとうはひとりじめしたくていってるんでしょ？
じぶんだけなかよくしているなんて、ずるいとおもうの」
ちょっとした反撃とばかりに、ユウイは早口でヨーダに言った。それを聞いたヨーダが、くつくつと笑い出す。ユウイはさらに顔を赤くさせ、続けた。
「おとこなんてこどもだから、こどもよりこどもっぽいことするけど、おとこのよくばりとひとりじめはよくないって、ママがいって

たわ！」
　そういって人差し指をヨーダに向けて反撃するユウイを見て、ヨーダはユウイから顔を背けさらに笑い続けた。
「あのさ、おまえの母親は、おまえに教えることだいぶ間違えていると思うよ」
「なんで？」
　ユウイは顔を赤くさせたまま、腕を組み首を傾げた。そこでまたヨーダが耐えきれないとばかりに吹き出し笑った。
「めんくいはあそびにんなのよ！　ながくはつづかないのよ！」
　ユウイは何故ヨーダがそこまで笑うのか理解出来ず、自分の顔が恥ずかしさからどんどん赤くなっていくのを感じたが、勢いでどんどん言葉が飛び出してしまい、正直自分でも何を言っているのか分からなくなってしまっていた。
「なによ！　そんなにわらうことないじゃない！　しつれいだわ！」
　ユウイはこれ以上無いくらい赤くした顔でヨーダに抗議した。「こんなにはらのたつことははじめてなのよ！」と、唇を噛み締めてヨーダを睨む。それを見てさらに軽快に笑い出したヨーダが、呼吸を乱してユウイに言った。
「あのさ、顔がどうとかいう前に、あいつ、男だから」
　ユウイの動きが、まるで時間が止まったかのように、ぴたりと止まった。
「多分間違えてると思ったけど……」
　笑い続けていたヨーダが、呼吸を整えてユウイを見た。ユウイは身動き一つ取らずに、まるで石のように固まってしまった。
「まぁあの容姿だし、間違えない方がおかしいのかもしれないけど……聞いてるか？」
　呼び掛けに無反応なユウイをみかねたのか、ヨーダがユウイの顔の前で魔法を解くように手拍子を打った。硬直していたユウイはぱちぱちと瞬きをしてヨーダを見た。
「うそでしょう！」

「ああ、嘘かも。俺嘘つきだから」
「だって、そのおようふく、カナタのだっていったじゃない！」
ユウイはレジの上に置かれた服を指差しヨーダに言った。真っ白なレースと色とりどりのビーズ。どうみても女の子のものにしか見えない。
「カナのだよ。あいつ自分の容姿に関してまったく気にする様子無いし、男物より似合うから……」
ヨーダはそこまで言うと、口元を手で押さえ、吹き出すように笑い出した。今の話が本当なら、この悪魔はカナタまでからかって遊んでいるのか。だけど、カナタは本当に男の子なのだろうか？　そっちが嘘で、からかわれてるのは自分？　ユウイは混乱して頭から湯気が出そうだった。
「どっち！？　結局どっちなの！？」
「さあな。頑張って自分で確かめろよ」
「そうね……って、ばあいによってはたしかめられないわ！！」
「……普通に本人に聞けばいいだろ。何考えてんだお前」
「……やらしい」。いつのまにか笑いを抑えて平然としているヨーダが、冷ややかな視線をユウイに向けていた。絶対からかわれてる！　ユウイは恥ずかしさと怒りで顔を真っ赤にさせながら、店を後にした。

本当に本当に意地悪だわ！　頬をめいいっぱい膨らませ、ユウイは再び大通りを歩き始めた。
主の孫に会うには、許可証が必要。カナタが女の子なのか男の子なのかはこの際置いておいて、ユウイは許可証を手に入れる方法を考えてみた。いや、それより今日一日お城の前で孫達の誰かが出て来るのを待つべきだろうか？
ユウイはまた首を傾げ、体を斜めにする状態で考え続けた。するとそこに弾けるような笑い声が聞こえ、ユウイは慌てて近くの建物の影に逃げるように隠れた。

通りを挟んだ向こう側で、数人の子供達が楽しそうに笑い、通り過ぎて行く。それを建物の影から眺めていたユウイは、子供達の姿が見えなくなるのを確認すると、ほっと溜め息をついてその場に座り込んだ。

（みつかったら、きっとまたわらわれるのよ）

自分は変な子。面倒くさい子。そう思われている。そう考えるとユウイはどうしても街の子供達と友達になる気にはなれなかった。でも、今は別にそれでも良いのだ。これからカナタと友達になるのだから。カナタと友達になって、あんな風に笑ってお喋りして、楽しく遊ぶんだから。今頑張れば、これからきっと楽しい毎日がやってくる。

けれど、何故だか胸の奥がむずむずとする。

ユウイはその場に座り込んだまま、建物の隙間から空を見上げた。流れていく雲を眺めていると、一羽の白い鳥が飛んでいくのが見えた。それを追うように、二羽のカラスが飛んでいく。ぼんやりとそれを眺めていたユウイは、ふと我に返り立ち上がる。

「あれ、もしかして……？」

広大な砂漠のくぼみで見た、あの白い翼。ユウイは慌てて翼を追い、路地裏へと足を進めた。

路地を入ってしばらくすると、ユウイはまた帰り道が分からなくなるのではと後ろを振り返った。足踏みしながらその場で一回転し、でもこのまま帰れないわ！　と再び足を進める。もしかすると、またカナタに会えるかも知れない。

路地に入って四つ目の角を曲がったところだった。上空で白い翼はカラスに追いつかれ、突かれ、羽を毟られて落ちていく。ユウイはそれを受け止めようと走り、両手を掲げ滑るように転んだ。そこへ翼が旋回しながら弱々しく落ちてくる。ユウイは擦りむいた膝の痛みに耐えながら、めいいっぱい両手を伸ばし、翼を手のひらに受け止めた。

ふわふわの感触を手に感じて、ユウイはそっと手のひらを覗いた。

ふわふわだけど、ぼろぼろになったそれは、たしかにあの時見た翼だった。
翼はユウイの手のひらで小さく震えると、弾けるように光を上げ黄金色の二枚の羽根になってしまった。ユウイは羽根を手のひらに乗せたまま、おろおろとしながら立ち上がった。
辺りを見渡して、手のひらのそれを見る。綺麗な黄金色の二枚の羽根は、どこへ向かおうとしていたのだろう。
「とどけなきゃ、だめかしら……」
けれど、ユウイはカナタのいる風の塔への道を知らない。これ以上路地裏に入ってしまうと、また迷子になってしまうかもしれなし、叱られるかもしれない。
その時だった。路地裏の奥から、ガシャリ、ガシャリと物音が聞こえて来た。この音は、前にも路地裏で聞いた音だ。ユウイは慌てて二枚の羽根をポシェットにしまい、来た道を引き返していった。
路地裏を抜け、再び大通りに出た。後ろを振り向き、何も無い事を確認すると、ほっと息を吐いた。一体あの音は何だろう？　やっぱりおばけかしらと、ユウイは想像し、その身を震わせた。
大通りを歩き始めると、気がつけば再びカルペディエムの前まで来ていた。ポシェットの中の二枚の羽根は、ヨーダに預けるべきだろうか？　ユウイはお店の前を行ったり来たりしながら考え、それからそっとお店の中を覗いた。すると、レジの前にヨーダの姿は無く、そこにいたのは白髭のおじいさんだった。
白髭のおじいさんはユウイに気がつくと、のんびり椅子から立上がり、こちらに向かって歩き始めた。ユウイはその場で身を隠すように縮こまったが、おじいさんからユウイの姿は丸見えだったようで、ショーウィンドウの中からユウイに手招きするのだった。
ユウイはおずおずと店の扉を開け、中へと入った。きょろきょろと店の中を見渡しても、やはりヨーダの姿は無かった。
「ヨーダならおらんよ。どうしたね？」
おじいさんは白髭を撫で付けながらユウイに問うた。ユウイはも

じもじと下を向き、何と答えたら良いのか考えていた。このおじいさんは果して、優しいおじいさんだろうか。それとも恐ろしいおじいさんだろうか。見た目は優しいおじいさんだけれども、もしも中身が恐ろしいおじいさんだとすると、さっきも路地裏に入った事が分かれば、きっと叱られるに違いない。

ユウイが何も答えられずに下を向いていると、おじいさんは「ほっほう」と一言だけいい、そうして大きく笑い始めた。

「そうか、そうか。あれじゃな、あの悪ガキに、わしの事を恐ろしいじいさんとでも吹き込まれたんじゃな？　なぁに、とって食いやしない。おまえさんはユウイだろう？」

ユウイは慌てて首を振り、それから頷いた。慌てふためくユウイの姿を見て、おじいさんはまた「ほっほっほ」と笑い、ユウイを店の奥へと手招きした。

「おまえさんのことは、うちの悪ガキから聞いておるよ。路地裏を抜けて、カナに合った」

おじいさんは店のレジの引き出しを探り、太いマジックを取り出した。それからもう一度引き出しの中を探り、困ったように頭を掻いた。

「七人の主も孫も、キュリカ……あの城からは出てこんよ。合えるのはうちの悪ガキか、わし。運が良ければカルエルじゃなぁ」

引き出しを引張り出して、おじいさんはそれを抱えるようにごそごそと中を探りながらユウイに言った。それから「ないのう……」と頭を掻いてユウイの顔を見た。

「カルエルには会えんかったじゃろ？　あの子はこのところ具合が悪くて外には出られんのじゃよ。わしも今からキュリカで仕事じゃ。しばらく帰ってはこれない。ヨーダの意地悪は許可を出さなかったじゃろ？　まったくもって意地悪じゃのう」

おじいさんは溜め息をついて、それから思い出したように自分のポケットを探った。そうしてポケットから一枚の白いハンカチを取り出すと、再びユウイに手招きをした。

「意地悪だけど、とても詰めの甘い意地悪じゃ。運が良ければすべて片の付く、甘い意地悪じゃのう」
手招きされたユウイがレジの台を覗き込むと、おじいさんは白いハンカチに何かを書き始めた。ユウイはどうしていいかわからず黙ってそれを見ていた。
「おそらくはカルエルなら友人になってくれる。カルエルがだめならわしが許可を出すだろうと見越しての意地悪じゃ。どちらも運が良ければ出来る事。そしてお嬢ちゃんは運が良かった」
そう言っておじいさんはユウイにハンカチを渡した。そして「わしの名前はコルト・クレスクントじゃ。お見知りおきを、小さなレディさん」というと、小さく会釈をした。そしてハンカチには、今紹介のあったおじいさんの名前が記されていた。
「さて、それを持って行けば、キュリカの中には入れるぞ。本当は許可証用の紙があったはずなんだかの、それでもまぁ大丈夫じゃろう」
そう言ってコルトはまた笑った。ユウイは許可証がここで手に入るとは思ってもみなかったので、どうしていいかわからずハンカチを握り締めながらただその場に立ち尽くしていた。
「どうしたね？　わしの許可証じゃ不安かね？」
不思議そうに首をかしげるコルトに、ユウイは慌てて首を振った。
「あの、どうして、きょかしょ」
「わしは可愛くて運の強い子が好きじゃ。それから……」
コルトはレジから一番近いテーブルにのんびり歩いて行き、皿を一枚手に取ると、振り返りその皿をユウイに見せた。皿の上には小さなニンジンが二つ、申し訳なさそうに乗っていた。
「あやつめ、わしの今日のランチにニンジンを仕込みおった。いや、わしは別にニンジンが嫌いなわけではないんじゃよ。ただちょっと今日はニンジンの気分ではなかった」
コルトは難しい顔をして皿をテーブルに戻すと、ふわふわの白髭を撫で付け、

「ヨーダの意地悪に、今日はちょっとばかし仕返しをしてやりたくての、仲間が欲しかったんじゃ」
とユウイに言った。ユウイはコルトが小さな子供のように見えて、思わず笑ってしまった。
「ところでレディさん、本当に、カナの友達になってくれるのかね？」
くすくすと笑っていると、コルトがユウイにそう問うた。ユウイはコルトに大きく頷いて見せた。
「そうかそうか。でものう、あの子と友達になるということは、とても難しいことじゃよ。友達になっても、そのことは誰にも言えんし、誰かに見つかってわし以外の老いぼれ六人に報告されたら、お嬢ちゃんは街から追い出される。普通の子のようには遊べんよ？」
「あの、その……なぜカナタはあのとうにいるの？　なぜまちであそんじゃあいけないの？　ヨーダが、カナタはきらわれてるっていってたわ。どうして？」
ユウイはずっと感じていた疑問をコルトに訊いた。コルトはしばらく考え込むようなしぐさを見せて、それから言った。
「色々事情があるんじゃよ。一つだけ言えることはの、風使いがこの世界に一人、あの子しかいないことにある」
コルトはテーブルの椅子に座ると、ふう、と溜め息を付き、続けた。
「街はあの子を守ってると言っとるがの、希少価値が高いから、色々なことに利用出来る。だから逃げられないように捕まえとく。それだけのこと。守るどころか、大人の事情に巻き込まれて、閉じ込められて、ひとりぼっちじゃよ、あの子は」
コルトはそう言うと、また溜め息を付いた。ユウイには大人の事情と言うものがわからなかったが、ひとりぼっちであの塔に閉じ込められているカナタの事を考えると、可哀相でならなかった。
「でも、どうしてきらわれてるの？　なにも、わるいことなんてしてないんでしょう？」

「悪いこと、悪いことかね……そうじゃのう……」
コルトはそう呟くと、俯き、遠くを見るような目で続けた。
「悪いことか、良いことか、わしは今でも分からんよ……そうじゃのう、気になるなら、本人に訊きなさい。わしの口からは上手く言えんのう」
ぼんやりと、一人ごとのようにコルトは言った。ユウイはコルトがなぜ教えてくれないのかわからなかったが、黙ってそれを訊いていた。
「やはりとても難しいことじゃ。それでも友達になりたいかの？」
コルトの表情は穏やかだった。けれどその瞳は真剣だった。わからないことが沢山ある。カナタは物語のような囚われのお姫様ではないように感じた。けれど、ユウイの気持ちは変わらなかった。
「わたし、やっぱり、カナタとおともだちになりたいわ。ひとりぼっちは、さみしいもの」
ユウイがそう言うと、コルトは「そうか、そうか」と笑い、白髭を撫で付け、言った。
「そうじゃの。ひとりぼっちはさみしい。お嬢ちゃんはそれをよくわかっている。お嬢ちゃんなら、きっといいお友達になるじゃろうなぁ」
コルトは立ち上がると、のんびりユウイの元まで歩き、ユウイの頭を撫でた。撫でられた頭がぽかぽかする。ユウイは頭に両手を乗せ、このおじいさんは恐ろしいおじいさんではないわと確信した。
「さぁて、申し訳ないんじゃがの、わしはそろそろ出かけねばならん。お嬢ちゃんも、そろそろ帰らねばならん時間じゃろう。キュリカに行くなら明日にした方がいい。今日はのう、これからキュリカで孫もじじいもつまらん顔付き合わせながらの会議なんじゃ。また追い返されてもつまらんじゃろう」
「あの、まって！　これを……」
ユウイは慌ててポシェットを探り、二枚の羽根を取り出すと、コルトの前に差し出した。

「あの、これ、さっきひろったの……カナタのでしょう？」
「おお、願い羽根じゃな？」
「ねがいばね？」とユウイは首をかしげながらコルトに訊いた。
コルトは目を見開いて、物珍しそうにユウイの手の中の羽根を見つめていた。
「これはの、別名グノーシスの羽根といって、とても貴重なものなんじゃよ。これをどこで見つけたね？」
「あの……ごめんなさい。ろじうらで、カラスにおそわれていたの」
「カラス？　するとミシェルの仕業じゃな……」
コルトは眉間にしわを寄せ、腕を組んで「うむむ」と唸った。ユウイは再び路地裏に入ったことを叱られると思っていた。しかしコルトはユウイの顔を見ると、叱るどころかニコニコと微笑みかけてきた。
「その羽根はのう、役割を終えるまで翼から元の二枚羽根には戻らないんじゃよ。つまり、お嬢ちゃんに用があって飛んで来たんじゃなぁ」
「わたしに？」
「そうじゃ。願い羽根は人の願いを運ぶ。おそらくカナがお嬢ちゃんを心配して飛ばしてきたのじゃろうなぁ」
コルトは「しょうがないのう」と頭を掻きながら言うと、嬉しそうに笑った。
「それはお嬢ちゃんから返してやりなさい。その方があの子も喜ぶ」
「あの、かえすって、どうやって？　カナタにあっていいの？」
「いや、会わなくても返せるんじゃ。カナはお前さんに宛てて羽根を飛ばした。次に羽根を飛ばすことが出来るのはお嬢ちゃんだけじゃよ。そういう決まりじゃ」
「きまり？」
「そう、受取人しか飛ばせない。なぁに、簡単なこと。その羽根を両手で包んで、伝えたいことを頭で考える。すると羽根は翼に変わってカナの元に飛んで行くよ」

ユウイは言われるまま両手で二枚の羽根を包み、カナタに伝えたいことを考えてみた。何を伝えるのが良いだろう。今日は色々な事があった。ヨーダは相変わらず意地悪。おじいちゃんは優しい人で、門番さんは怖かった。カナタは今日何をしたかな？　伝えたい事が沢山ある。

ユウイが何を伝えようか迷っていると、コルトはそんなユウイを見て楽しそうに笑った。

「伝えたいことが沢山あるようじゃのう。どうじゃ、うちに帰ってゆっくり考えてみては？　急がずともそれくらいは待ってくれるじゃろ」

ユウイが大きく頷くと、コルトは大きく「ほっほっほ」と笑った。その姿を見て、やっぱりヨーダのおじいちゃんは季節外れのサンタクロースさんみたいだわとユウイは思った。

「ありがとう、おじいちゃん」

店のドアの前でユウイがお辞儀をすると、コルトは白髭を撫で付け、会釈をした。

「なぁに、礼はいらんよ。またおいで。小さなレディさん」

ユウイは外に出た後もガラス越しに大きく手を振り、カルペディエムを後にした。

許可証と二枚の羽根を握りしめながら、ユウイは帰路を走り出した。家に帰ったら、まず何をカナタに伝えよう。まずは許可証が手に入ったことを教えてあげなくちゃ。そうして明日はキュリカに行って、主の孫とお友達になって、そしたらカナタともお友達になれるんだよって、また会えるよって伝えなくちゃ。

楽しいことばかりが頭に浮かんで、息が弾んだ。明日からは楽しい毎日が待っているんだわ。今まではちょっとボタンを掛け違えていただけ。今ようやくボタンが正しくかけられたのねと、ユウイは握りしめた許可証を確認し、うふふと小さく笑った。

息を切らせ家の前の角を曲がると、うちの前にマーガレットの後ろ姿があった。ユウイはポシェットに二枚の羽根と許可証をしまう

と、マーガレットのもとへと走った。
　ママ、と声をかけようとしたところで、マーガレットが振り向いた。マーガレットはそばに置いてあった箒を手に取り、くるりと柄を下にして地面を叩いた。ユウイの動きがぴたりと止まる。女王様だ……！！　杖を武器に持った女王様がここにいる！！　ユウイは何故女王マーガレットが怒っているのかわからず、その場に立ち尽くした。
「どういうことか、説明しなさい。あなた、キュリカの前で何をしていたの？」
　ユウイの心臓が、大きく脈打った。なんでママがキュリカにいたことを知っているのだろう。ユウイはなんて答えたらいいのかわからず、マーガレットからゆっくり目をそらし、地面を見つめた。
「あなたがキュリカの前をうろちょろしているのを、街の人たちが見ていたの。あそこに一体、何の用があったというの？　あそこは子供の遊び場じゃないわ」
　落ち着いているけれど、その声の中には厳しさが滲んでいる。ユウイの背中に汗が伝う。街の人が見ているなんて気にも留めていなかった。何か言わなくちゃ。ユウイはしどろもどろになりながらマーガレットに言い訳を考えた。考えながら、また嘘をつかなくてはいけないのかと罪悪感にとらわれた。今また嘘をつくと、その嘘をずっと守らなくてはいけないことになる。嘘つきでいることは、胸がもやもやして嫌だった。
　結局何も言えず下を向くユウイを見下ろしていたマーガレットが、大きくため息をついた。
「いいわ。ママもきちんと注意しなかったものね。あのね、キュリカは七の主が集まるところなの。街の人たちは基本的にあの場所には近づいてはいけないことになっているのよ。あなたがキュリカの前で何をしていたのかは知らないけれど、もうあそこには近づいちゃ駄目よ。路地裏と一緒」
「わかった？」と、マーガレットはユウイに問う。ユウイは頷こ

うとして、ぴたりと止まった。ここで頷いたら、キュリカに行けなくなる。カナタと友達になりたい。明日もキュリカに行きたい。頷いたら、嘘つきになる。嘘つきの友達って、カナタは嫌じゃないかしら。嘘ついて友達を作るって、何かおかしくないかしら。

ユウイは無言のままマーガレットの横を通り過ぎようとした。頭がこんがらがって湯気が出そうだった。そこへ、マーガレットの自分の呼ぶ声が飛んできた。

「ユウイ、言うことが分からないのなら、明日から外には出さないわよ。しばらく遊びに行くのは禁止だわ」

ユウイはその言葉に驚き、振り向いた。マーガレットは腕を組み、ユウイを見据える。

「あのね、朝も言ったでしょう？　七の主にかかわると面倒なことになるの。この街にいられなくなるのよ？　わかってるの？」

「このまちにかってにつれてきたのは、ママじゃない！！」

ユウイの中で、何かが弾けた。せっかく上手くいくと思っていたことが阻まれた。そのことが悲しくて、今までの不満が口をついて出ていく。

「ママはかってなのよ！　パパのこともなにもおしえてくれないし、わたし、すきでママについてきてない！　おばあちゃんにだって、ほんとうは会いたいのに！！」

「ひとりぼっちは、もういやだわ！！　ママなんてだいきらい！！」そうマーガレットに向かって叫ぶと、　ぽたぽたと涙があふれ出てきた。今まで我慢していたものが噴出してしまった。ユウイはそのまま家の中に入ると、さらに胸の奥にもやがかかっていくのを感じながら部屋へと戻った。

部屋の扉を開けると、ユウイはそのままベッドに倒れ込むように寝ころんだ。ずず、と鼻水をすすり、枕に顔を埋めると、さらに涙が溢れ出てきた。こんなこと、望んでいたわけじゃないのに。ただ普通にお友達を作って、普通に遊びたいだけだったのに。どうして上手くいかないのだろう。

ふと窓際にある小さな机の上に目をやると、木製フレームの写真立てが目に入った。中の写真はここへ引っ越してきたときに仕舞ってしまった。クレスと祖母が写っていたから、なんとなく飾っておくのはマーガレットに悪い気がしたからだった。

明日から、どうしよう。ユウイはぼんやりと空の写真立てを見つめながら、これからの事を考えた。マーガレットは、キュリカに行くなら遊びに行かせないと言っていた。でも、キュリカに行かねば、主の孫と友達にならねばカナタとは友達になれない。ただ街に出たって、自分は一人ぼっちだった。

ユウイは寝ころんだまま、着けたままだったポシェットの中身をすべてベッドの上へと出した。ハンカチや飴玉に混じって出来た許可証と二枚の羽根が、なんだか色あせたように見えた。

そうだ、カナタに返さなきゃいけないんだった。二枚の羽根を握りしめて、ユウイはベッドから起き上がり部屋の窓を開けた。もう日は暮れていて、まあるい月が夜空にぽっかりと浮いていた。

羽根を握りしめて、ユウイはカナタに何を伝えようか考えた。けれど頭の中はぐちゃぐちゃで、考えが一向にまとまらなかった。どろどろとした感情だけが、握りしめた手から羽根に伝わりそうで、ユウイは小さくため息をつくと羽根を握る手を緩めた。

その時、二枚の羽根が小さく震えた。そして瞬く間に部屋いっぱいに金色の光が広がっていく。驚いたユウイが二枚の羽根から手を放すと、羽根は回転して一対の翼へと変化したのだった。

金色の光を放ちながら、翼はユウイの頭上を旋回し、しばらくするとぽとりと力なくベッドの上へと落ちた。ユウイが恐る恐る翼に近づき人差し指でつつくと、再びふわりと浮きあがり、また力なくベッドの上に落ちた。

ユウイはしばらくベッドの上の翼を見ていたが、ああ、と手のひらを拳で打ち、きょろきょろと部屋の中を見回した。

「あなた、もしかして、おなかがすいているんじゃあ……？」

ユウイがベッドの上の飴を手に取り、包装紙を剥いて翼の前に差

し出すと、翼は嬉しそうにユウイの手のひらの上に乗り飴を両翼で包み込んだ。一瞬、翼の輝きが金色から飴の色のピンクに変化して、元に戻った。翼がユウイの手のひらからゆっくりと浮き上がると、そこにあったはずの飴は跡形もなく消えていた。

ユウイが手のひらを見つめていると、翼がユウイの前を飛び、そのまま窓の方へと向かって羽ばたいた。そして窓の前でユウイの方へ振り向くと小さく震え、ぱたぱたと翼を羽ばたかせた。すると翼から小さな星形のガラスが一つ、また一つと転がり落ちて、小さな輝きを見せるのだった。

しゃがみ込んで星形のガラスを拾い、ユウイが窓を見上げると、翼は月に向かって飛び立ってしまった。ああ、まだ何も伝えたいことを教えていないのに。窓から身を乗り出して翼を見送ると、ユウイは手にしたガラスを月明かりに照らした。

†

翼がユウイの元を発ってから、三日が経った。その間ユウイはマーガレットと一言も口を利かなかったし、なるべく顔を合わさないように部屋から殆ど出なかった。

三日目の朝、マーガレットが仕事に出かけたのを見計らい、部屋から出て台所に向かった。久しぶりに作った目玉焼きは自分の気持ちと同じで、黄身がつぶれてぐしゃぐしゃだった。それを見たユウイの顔もまたぐしゃぐしゃになった。もうどうすればいいのかわからない。マーガレットも自分にまったく声を掛けないし、きっともうママはわたしのことなんてどうでもよくなったんだと、ぐしゃぐしゃの目玉焼きをつつきながらユウイは思った。

朝食を食べ終え、食器を洗っていると、外から子供たちのはしゃぐ声が聞こえてきた。ユウイは一時皿を洗う手を止めたが、何も聞こえないふりをして皿洗いを続けた。

皿洗いを終え椅子に座ると、テーブルの上に置かれていた新聞を手に取り広げてみる。日付は三日前の物だった。ユウイは広げた新聞が穴だらけなのを見て、そういえば前にママが「新聞は主達が自分たちに都合の悪いことを全部切り取ってから配られる」と言っていたのを思い出した。だから三日も経ってからポストに投函されることなんて珍しくなかった。

虫食い新聞を覗き込んで、ユウイはため息をついた。そもそも新聞なんて難しくて読めないんだもの、いっそのこと全部切り取ってしまってもいいのにとユウイは思った。

滑り落ちるように椅子から降りると、ユウイは部屋に戻ろうとのろのろ歩き始めた。するとまたユウイの耳に子供たちの遊ぶ声が入ってきた。ユウイはしばらくその場で立ち竦み、子供たちの声が遠くなっていくのを聞いていた。また胸の奥がムズムズとする。遠くなった声をなんとなく確認したくなり、そっと台所の窓を開けた。恐る恐る外を覗き込むと、そこにはもう誰もいなかった。

ふう、とため息をついて、窓を閉めようと手を伸ばすと、ふわりと優しい風が吹く。手を止め再び窓の外を覗き込むと、その瞬間突風が吹きこみ、驚いているユウイの頭上に白い何かが飛び込んできた。尻餅をついて、ユウイが頭上を見上げると、白い翼が旋回していた。カナタの願い羽根だわ！　とユウイは慌てて立ち上がり翼を受け止めようと両の手を前に差し出した。

翼をよく見ると、何か袋のようなものをぶら下げているようだった。ゆっくりと降りてくる翼を手のひらに受け止めると、翼は袋を残し金色の光を放ちながら二枚の羽根に戻ってしまった。

翼が二枚の羽根に戻った瞬間、袋はずしりと重くなった。ユウイは緊張した面持ちで袋の中を確認しようと紐を解く。中には蝶の細工が施してある白い望遠鏡のようなものが入っていた。

ユウイが首を傾げ、その望遠鏡の穴を除いてみると、外は全く見えなかった。ただ白い世界だけがそこにはある。ユウイは唇を尖らせ、体を斜めにして考えたが、これが一体何なのか全くわからなかった。他には何か入っていないかしらと、今度は袋の方を覗き込んだ。すると小さく折りたたまれた紙が一枚袋の底に入っているのを見つけた。

？筒の底は蓋になっています。左に回して開けたら、願い羽根が落としていったガラスを入れて、蓋を閉めたら穴を覗いてごらん？

紙には小さくそう書かれていた。ユウイは説明の通りに蓋を開き、部屋に置いてあった星形のガラスを筒の中に入れた。そうして穴から筒の中を覗き込むと、わあっと声を上げ筒を回転させた。

カレイドスコープだわ。ユウイは筒を覗きこみ回転させながら近くにあった椅子に座った。回転させるたびキラキラと不思議な模様を描き出すそれを見ていたら、殺風景な部屋がまるでおとぎの国のように感じられて楽しかった。空、海、大地、お城のシャンデリア、魔法の国。これはきっとお姫様のイヤリング。ユウイは時間を忘れて筒の中を覗き込んだ。

しばらくカレイドスコープを楽しんでいると、家の前を子供の声が通り過ぎた。それで夢の世界から現実に戻されてしまったユウイは、ため息をついて再び折りたたまれた紙を広げ見た。するとカレイドスコープの説明のほかにも、小さな文字で何か書かれているのを見つけた。

？幾重にも折り重なっている世界には、幾つもの道があります。どうか本当に進むべき道を見失わないでいて？

小さいけれど、とても丁寧な字で書かれているその言葉を、ユウイはカレイドスコープを握りしめ、子供たちが外で放つ弾けるような声を聴きながら、何度も繰り返し読み返した。胸の奥のもやもやが、少しずつ晴れていくのを感じながら。

次の日の朝、ユウイはマーガレットが出かけるのを見計らって起

き、着替えてポシェットを肩に下げると、家の外に誰もいないことを確認しながら扉を開け外に出た。そうしてゆっくり深呼吸をすると、よし、と小さく呟いて大通りに向かい歩き始めた。
早足になるにつれて、自分の心音も早くなっていくのを感じた。街の人々とすれ違うたび呼吸が弾む。朝の陽ざしがいつもより眩しかった。
大通りに出ると、ユウイはカルペディエムの前で立ち止まり、店の中を覗き込んだ。するとユウイの姿に気が付いたコルトが手を振り、ユウイもそれに応えるため大きく手を振った。それから噴水広場まで行くと、噴水の前のベンチに座りポシェットの中を探った。
ポシェットから取り出した小さな手のひらには、ガラスの星屑があった。それをぎゅっと握りしめて、ユウイは噴水横の時計台を見た。
ベンチに座って一時間が過ぎたころ、噴水前に集まった鳩をぼんやりと見ていたユウイの耳に子供達の声が入った。ユウイはするりとベンチから降りて声のした方を見やる。視線の先には五人の少年と少女がいた。
ユウイは大きく深呼吸をして、楽しそうにお喋りをするその五人の前に立った。初めに少女の一人がユウイに気づき、立ち止まると、他の四人も立ち止まり、ユウイを見た。
「あの……、わたし」
ユウイが口を開くと、大柄な少年が笑った。
「なんだよ、何か用？　ていうか、お前喋れたの？」
大柄な少年はユウイに向かってそういうと、他の子供たちを誘うよう、からかうように笑った。ユウイの表情が強張る。最初にユウイに気が付いた少女が、ぼさぼさの髪を手で押さえながら諌めるように大柄な少年の腕を小突いた。
「ねえ、私たちに何か用？　これからみんなで何して遊ぼうか話していたところなの。君も」
「やめとけよ！　こいつ喋んないし、すっげぇめんどくさいんだぜ。

すぐ泣くしさぁ！」
「そうそう。こんなやついたらつまんねーよ」
「こいつ、何か月か前に引っ越してきたあの変な子だろ？　やめとけやめとけ！」
少女の声を遮るように、少年達が口々にユウイを馬鹿にした。ユウイが緊張から声も出せず立ち竦んでいる横を、子供たちが通り過ぎていく。ユウイに話しかけたぼさぼさ頭の少女も、ユウイを気にしながら他の子らについて行ってしまった。
ユウイの瞳に涙が滲んだ。ぎゅっと拳を握ると、手のひらの星屑が痛かった。ユウイは手のひらを見つめ、もう一度固く握りしめると、その手で涙を拭って振り返り走り始めた。
楽しそうな子供たちの横を走り抜け、振り向いて止まると、ユウイは大きく息を吸って叫ぶように言った。
「わたしもいっしょにあそびたいの！！　なかまにいれて！！」
噴水前の鳩が一斉に飛び立った。ユウイは肩で息をしながら、あっけにとられる子供たちの顔を見据えた。
「なんだよ……なんなんだよこいつ……」
大柄な少年が、一歩引いてユウイを見た。他の子供たちもユウイの勢いに押されて後ずさった。そんな中、やはりぼさぼさ頭の少女がユウイの前に立ち、ユウイの身長に合わせるように屈み笑顔を見せた。
「いいよ。一緒に遊ぼう。何して遊ぶ？　缶蹴りとか知ってる？　鬼ごっこ、好き？」
「おい！　勝手に……」
大柄な少年が少女の肩をつかみ止めに入った。少女はその手を払うと、大柄少年の鼻を突いた。
「いいじゃない。この子、面白いよ。ねえ、名前、なんていうの？」
ぼさぼさ頭の少女が、ユウイに問うた。握りしめていた手のひらの中で、星屑が光る。まるでカナタが優しく背中を押してくれているように感じた。

「……ユウイ。あなたは？」
「私は……」
陽ざしの中で、ぼさぼさの頭を掻きながら少女が笑う。他の子供たちも、少女にあきれた様子を見せながらも自分達の名前を言った。ユウイはぺこりと頭を下げると、再び歩き始める子供たちの輪の中に入り歩き始めた。
嬉しくて嬉しくて、涙がこぼれそうになるのを必死で堪えながら。

†

「で、リアナ、カルテ、ギガ、ペテロ、ミストと友達になりました、と？」
カルペディエムのレジの前で、ヨーダが頬杖をつきながら、トレーにサンドウィッチを乗せ得意げな表情で差し出すユウイに言った。
「あのさ、なんかおもいっきり名前間違えてませんか？　お前」
ヨーダが片手で頬杖をついたまま、片手でめんどくさそうにレジを打っている。ユウイはサンドウィッチを受け取ると、得意げな顔のまま店の奥のテーブルに向かい椅子に座った。「なんだ、食べていくのか……」と、ヨーダが迷惑そうな顔をしながら店の裏に入っていく。おそらく紅茶を淹れにいったのだろうなとユウイは思った。
しばらくすると、ティーポットとカップを持ってヨーダが戻ってきた。はあ……とため息をつきながら、ヨーダが紅茶を注ぐ。ユウイはサンドウィッチを頬張りながら「ちょっと、さっきからしつれいだわ！」とヨーダに抗議した。
「失礼なのは生まれつきです。そんなことより、お前、俺の言ったこと理解してなかったの？　俺、街の子供と友達になってこいって

言ったか？」
ヨーダが心底呆れたような顔をしながら、ユウイのおでこを指で弾いた。ユウイはおでこを押さえながら紅茶を一口飲み、唇を尖らせた。確かに、ヨーダは七人の主の孫と友達になってこいと言った。そうすればカナタと友達になってもいいと。
「ほんとうに、それでいいのかなって、ずっとおもっていたの」
「何？」
レジに戻ろうとしていたヨーダが振り向く。ユウイは紅茶のカップを見つめながら続けた。
「カナタとおともだちになりたいとおもったのは、ほんとよ。いまだって、そうおもってる。ただ、なんていうか、みないふりしてたのも、ほんとなの」
言いたいことが上手く言えなくて、ユウイは眉間に皺をよせた。そう。カナタと友達になりたかったのは本当。けれど、それを理由にして、身近な街の子供たちと仲良くしようと考えなかったのも本当のこと。カナタはそれに気づいていた。それがユウイにとって良いことではないことも。願い羽根に、カレイドスコープに託された想いはきっとそういうことなのだ。
顔を上げると、いつの間にかテーブルを挟んだ向こうにヨーダが腕を組み座っていた。ユウイが口を開こうとすると、ヨーダはユウイの口に人差し指を当て、言った。
「いい。ただ一つ大事なこと忘れてる。マーガレットのことだけど」
マーガレット、と聞いて、ユウイの心臓がどきりと跳ねた。マーガレットとは相変わらず口も利いていない。ユウイは紅茶のカップを置き、俯いた。
「俺とお前が一緒に帰った次の日、マーガレットが仕事前に俺に所に来た。お前の事、よろしくお願いしますって、頭下げて言ったよ。その次の日も、その次の日も」
「今日もね」。ヨーダがユウイの口に当てていた指を外した。ユウイが顔を上げると、ヨーダがユウイのおでこを思い切り弾いた。

「二三日マーガレットの様子がおかしいから、どうせお前と喧嘩でもしたんだろうと思ったけど、お前が考えてるよりずっと、マーガレットはお前を心配してるんじゃないの？　この軽い頭じゃ、わからないかもしれないけれど……」
「また見ないふりする気？」。再び腕を組むヨーダが、おでこを両手で押さえるユウイに言った。弾かれたおでこよりも、胸の方が痛い。そんな気がした。
「もやもやするわ」
「……そのもやもや、どうすればいいのか、もうわかってるんだろ」
ユウイはおでこを押さえ、思い切り鼻をすすった。そうして大きく頷くと、えへへ、とヨーダに笑った。
ユウイが椅子から降りると、店内にベルの音が響き、カルペディエムの扉が開いた。ぼさぼさ頭の少女が、申し訳なさそうにこちらを覗き込み、扉を閉める。ガラス越しに外を見ると、他の四人もこちらを見ていた。
「お友達がお待ちのようですよ、洟垂れお嬢さん」
ヨーダが立ち上がり、ユウイの使っていた紅茶のカップを持って店の裏に下がっていった。ユウイが店を出る支度をしていると、店の裏に続く入口のカーテン越しにヨーダがユウイを呼んだ。
「忘れてたけど、どうすんの？　まだ勝負を続けますか？」
カーテンから顔を出し、ヨーダがユウイに問うた。ユウイの答えは決まっていた。
「つづけるに、きまってるのよ。あるじのまごだけじゃなくて、このまちのこども、ぜんいんともだちにしてきてあげるんだから」
そう言うとユウイはヨーダに向かって思いっきり舌を出した。それに応えて、ヨーダが追い払うように手を振った。
「ねえユウイ、あの人と話して平気なの？　怖くないの？」
ユウイがカルペディエムを出ると、開口一番にぼさぼさ頭の少女、カルテが言った。他の四人も不思議そうにユウイを見ている。ユウ

イは一瞬何を言われているのか分からなかったが、すぐにヨーダの事を言っているのだろうと思い、カルテに問う。
「こわいって、なぜ？　なにかこわくなること、されたの？」
カルテは頬をぽりぽりと掻いて、空を見上げた。それからユウイに視線を戻すと、真顔で言った。
「ない。なにもないわ。だって、話したことさえないもの」
「……じゃあ、なんで、こわいの？」
ユウイが首を傾げてカルテに問うと、カルテは苦笑いをしてユウイを見た。
「考えてみたら、おかしな話だね」
「おかしいわ。とても、おかしいとおもうの」
「でもね、お母さんもお父さんもあの人、怖いって言ってる。なんか、心の内、全部見透かされてるような気がするんだって。あの人、瞳の色が普通じゃないじゃん。だから余計にさ……みんな、隠したいことのひとつやふたつ、あるじゃない？」
そう言うと、カルテは自分の胸に手を当て「私なんか、ひとつやふたつじゃたりないけどねー」と嘆いた。そんなカルテを見て、みんなが笑う。
「でも、興味があるのよ。私も今度、カルペディエムでお昼買おうかなー」
そう呟くように言いながら、カルテが歩き出す。「今日は何して遊ぼうか？」とカルテがみんなに問うと、皆口々に何をして遊びたいかを言った。缶蹴りと鬼ごっこは飽きた、とか、リアナはままごとがしたいと言ったし、大柄少年ギガは「そんなことより戦おうぜ！　戦争！」と何やら物騒なことを言って棒を振り回しカルテに小突かれていた。ペテロとミストはトランプがいいと二人で盛り上がっている。
ユウイはそんな四人の後ろを歩きながら、遊ぶことよりもママにどうやって謝ろうかしらと考えていた。謝るなら、早いほうがいい。ユウイは今日きちんと謝ろうと決め、少し前を歩く四人に追いつこ

うと早足で歩き始めた。
きゃあ！　と叫ぶ声がした。リアナの声だった。他の四人も立ち止まって何か騒いでいる。ユウイは何があったのか確かめるためにみんなの元へ走り出した。
ユウイがみんなの元に辿り着くと、リアナが地面に座り込み泣いていた。どうやら転んだようだった。転んだ時に両手をついたのか、手のひらをすりむいている。大丈夫？　とユウイが声を掛けようとしたのを遮るように、幼い声が飛んできた。
「邪魔よ！　そんなところにぼさっと突っ立っていないで！　ほんと愚図な子たちね！」
声のした方を見やると、大通りに馬車が止まっていた。どうやらリアナは馬車を避け転んだらしい。そこから自分よりも幼い少女が顔を出し、こちらに叫んでいる。ユウイはこの街で馬車を見たのは初めてだったので、一体誰が乗っているのか分からず目を凝らして馬車を見た。
「キャロルじゃん……やばいよなあ？」
ユウイの横で、ギガが呟く。みんながその場で凍りついたように立ち竦む中、ユウイはキャロルという名前をどこかで聞いたわと思い、思考を巡らせた。
あ！　七人の主の孫だわ！　ユウイがキャロルという名前を思い出したのと同時に、カルテが馬車に向かって走り出した。それをギガが止め、リアナが「いいのよ！」と叫んだ。すると馬車から幼い少女が降りてきて、金色の縦巻きロールを揺らし、蔑むような目をしてカルテの前に立った。
「何よ。さっさと謝ってくださるかしら？　わざわざ降りてきてさしあげたのよ？　まさか私に逆らうような真似するために走ってきたんわけじゃあないわよねえ？」
幼い少女が、カルテの髪を掴み、自分の足元に向かって引っ張った。こんなこと、こんな小さい子供がするなんて。ユウイは驚き、とっさにカルテの髪を引っ張るキャロルの腕を掴んだ。

「何するの。放しなさい。あなた、私を誰だと思っているの？　おじいちゃまにこの街から追い出してもらうわよ？」
「しらないわ、そんなこと！　それよりカルテの髪をはなして！」
知らないはずなんてない。キャロルは、七の主の孫。友達になれとヨーダに言われたあの七人の孫だ。その祖父は七人の主。マーガレットが関わるとめんどくさいことになると言っていた、あの。
けれどユウイはキャロルの腕を放さなかった。なんだかとっても厄介なことになりそうなのは理解できた。それに、キャロルとは友達になんて到底なれない、なりたくない子だということも。
「いい加減になさい！」。キャロルがもう片方の手でユウイの頬を叩いた。ユウイがよろけて尻餅をつくと、キャロルはカルテの頭を地面に擦り付けた。「謝れって言ってるのよ！！」。カルテは何も言わずただ地面に顔を擦り付けていた。こんな小さな子、カルテなら振り払うなんて簡単なはずだろうに。ユウイは他の四人を振り返る。皆呆然と立ちすくんでいた。
「ごめんな、さい……」
カルテが地面に顔を伏せたまま、消え入るような声で言った。ふん、とキャロルがカルテの髪を乱暴に放す。
「口のきき方がなってないけど、いいわ。許してあげます。あなたたち、誰のおかげでこの街に住んでられるのか、よく考えるのね」
「あら、あなた幾分かましな顔になったわよ？」。埃まみれのカルテの顔を見て、キャロルが笑う。ユウイの中で、何かか弾けた。
ぱん、という軽い音が、周囲に響いた。手のひらが熱い。気が付くとユウイはキャロルの頬をひっぱたいていた。「ユウイ！」。カルテがユウイの服を引っ張り、止める。
「……やってくれたわね！！　あなた、ただじゃおかないわ！！」
キャロルが頬を押さえながら、ユウイを睨み付ける。子供の目じゃないわ。ユウイは背筋が凍るような感覚を覚えたが、負けじとキャロルを睨み付けた。
「……誰がただじゃおかないって？」

殺伐とした空気を割るように、涼やかな声がした。振り向くと、店のエプロンをつけたままのヨーダが腕を組み立っていた。
「誰かと思えば、七番目じゃない。邪魔しないで頂戴」
「何イライラしてんのか知らないけどさ、お前の声が煩くて、うちの店まで金切り声が響いてんだよ。このままだと営業妨害だ」
「七番目のくせに、私に意見する気？　あなたは庶民出の半端者。私に指図なんてしたらどうなるかわかってるの？」
「庶民出の半端者だからこそ、尚更どうでもいいんだよ。お前たちの貴族ごっこやら階級ごっこが」
ヨーダはユウイの前に立つと、キャロルを見下ろした。一歩引いて、キャロルがヨーダを睨み付ける。唇が震えていた。
「庶民は庶民の味方ってこと！　いいわ！　けれどその目が気に入らないのよ！　薄汚いアルト民族とやらの汚らわしい瞳がね！」
キャロルはそう叫ぶと「潰してやるわ！」と両腕を前に差出した。その両手に稲妻のようなものが走る。カルテが叫んだ。
稲妻の中から、ユウイ達に向かって銀色のピックが放射状に飛んでくる。危ない！　ユウイはヨーダの服を掴んだ。目の前が赤い光に包まれる。ユウイは固く目を閉じた。
木々のざわめく音がする。突如突風が吹き荒れた。しん……と、静寂に包まれた大通りの風景の中で、ユウイが目を開けると、足元に銀色のピックが数本落ちていた。
「どういうこと……」
ユウイが何事もなかったかのように腕を組んで立つヨーダの陰からキャロルを覗き込むと、キャロルの青ざめた表情が目に入った。キャロルの視線はヨーダではなく、自分でもなかった？。
「七番目じゃ、いけない？」
後方から、幼い子供の声がした。ヨーダが腕を組むのをやめ、振り向く。ヨーダの表情が明らかに変わった。蒼い瞳が揺らいだように見えた。ユウイはゆっくりと振り向き、声の正体を見止めた。
後方にある路地の前に、自分とそう年端の変わらぬ、ボブヘアー

の少女が立っていた。周囲の空気が今までと明らかに違う。真冬のように冷たい空気がそこに流れていた。
「キャロル、下がりなさい」
馬車の中から、静かな老人の声が聞こえた。「なんだ、禿ジジイ、いたんじゃないか」ヨーダが舌打ちをする。キャロルは「おじいちゃま……」と消え入るような声で言い、震えながら馬車に向かって歩き始めた。
馬車がキャロルを乗せ、走り始める。何事もなかったかのように風が吹き、空気が変わる。ユウイはずるずるとその場にへたり込んだ。その横で、カルテが横たわっている。ヨーダがカルテに声を掛けても反応はなかった。
「気絶してるだけだろ。目が覚めたら俺が送ってくる。他のガキどもは無事逃げたみたいだぞ」
他のガキども、と聞いて、ユウイは周囲を見渡した。リアナ、ギガ、ペテロ、ミストの姿はどこにもない。よかったような、さみしいような、複雑な気分になった。
「おそらくお前、明日からまた一人ぼっちだぞ」
カルテを抱きかかえると、ヨーダは路地の前に目をやった。ボブヘアーの小さな少女が無表情でそこに立っている。
「……おねえちゃん、おもしろいね。いっしょに、あそんでくれる？」
少女はユウイの前まで歩くと、ほんの少しだけ首を傾げた。ユウイはどうしたらいいのか分からずヨーダを見た。カルテを抱えたヨーダは、唇を噛みしめ、少女を見ていた。

†

呼吸が弾んでいる。胸がドキドキして今にも心臓が弾けてしまい

そうだった。
先に帰れ。そうヨーダに言われて、ユウイはカルテをヨーダに預け、ボブヘアーの少女を置いて家路についた。
玄関の扉を開くと、家の中は薄暗かった。時計を見ると十四時を回ったところだった。マーガレットが帰ってくるのは、いつも十八時頃だ。ユウイは台所に行き水を飲むと、その場にへたり込んだ。
ユウイは自分の右手を見た。この手でキャロルをひっぱたいた。人を叩くなんて初めてのことだった。相手は主の孫だ。大変な事をしてしまったに違いない。
叩いたこともそうだが、ユウイはキャロルがヨーダに向けて放った銀のピックの事が気になった。放たれる瞬間、キャロルの両手に稲妻が走るのを見た。赤い閃光も見た。一体あれは何？　まるで魔法じゃあないか。
それからあのボブヘアーの小さな少女。あの少女は一体何者だろう。あの少女の姿を見たキャロルの怯えた瞳、いつも飄々としているヨーダの表情も変わった。あの場所だけ真冬のように凍りついた空気が流れていた。
がちゃり、と扉の開く音がして、ユウイは飛び上がるように振り向いた。薄暗い台所に明かりが灯る。扉の前にいたのはマーガレットだった。
「とんでもないことをやってくれたわね」
腕を組み仁王立ちしているマーガレットに、ユウイは「ごめんなさい……」と蚊の鳴くような声で謝った。こんな風に謝るつもりなんてなかったのに。もっとちゃんと、嫌いって言ったこと、謝るつもりだったのに。ユウイは自分が何で謝っているのか分からなくなりそうだった。
マーガレットはため息をつくと「まあいいわ」と手に持っていた荷物を床に置いた。ユウイはもっとひどく叱られるとと思っていたので、拍子抜けした顔でマーガレットを見た。
「やってしまったことは仕方ない。街の人たちに何があったか聞い

たわ。でも、殴られたからって殴っていいわけでもない。相手が悪くても、暴力は駄目よ」
「はい……」ユウイはそう返事をすると、首を傾げた。街の人から聞いた、って、あの場所に街の人なんていたかしら。なんだか不自然なほど人気がなかったような気がするのに。ユウイがマーガレットにそのことを伝えると、苦笑いして言った。
「みんな近くの建物に逃げ込んで、中から様子を伺っていたんだって。助けてくれてもいいのにね」
ええ？　ユウイはがっくりと肩を落とした。マーガレットの言うとおりだ。誰か一人くらい助けてくれたっていいじゃないか。もしかすると、この街で一番一番怖いのは七の主なんかじゃなくて、平気で子供を見捨てる街の人達ではないだろうか？
「みんな、面倒くさいことはご免なのね。気持ちはわかるけど、なんだかがっかりしちゃったわ」
マーガレットはそう言うと、腕を捲り台所に立った。
「下ごしらえして、お夕飯は、一緒に食べましょう。これからの事はゆっくり考えればいいわ」
野菜籠の中から玉ねぎを取り出して、マーガレットがユウイに手渡した。ユウイはそれを受け取ると、無言で皮をむき始めた。今日あったこと、どこまでママは知っていて、私はどこまで話せばいいのだろう。
「……言いたくないことは言わなくてもいいわ。でも、時期が来たら、ちゃんとママにも話してね。ママも、パパのことちゃんと話すから、もう少し時間を頂戴」
ユウイは玉ねぎを剥きながら、こくりと頷いた。そうして剥き終わった玉ねぎをマーガレットに渡すと、ごめんなさいと大きな声で謝った。

変化は次の日から始まった。朝ユウイがマーガレットを見送り、身支度をすませ外に出ると杖つくおじいさんがのんびり歩いていた。

おはようございます、とユウイがあいさつすると、杖つくおじいさんは無言のままユウイの前を通り過ぎていった。耳が遠いのかしら？　ユウイは特に気にすることなく家を後にした。

今日はまず、カルテの家に行こう。ユウイは噴水広場の先にあるカルテの家へと向かった。昨夜は自分がこれからどうなるかということよりも、カルテのことが気になった。ヨーダはちゃんとカルテを送ってくれたのかしら。カルテはちゃんと目を覚ましただろうか。

早足で噴水広場を抜け、住宅街に入っていく。途中何人もの人とすれ違ったが、ユウイがあいさつをしても誰も返事を返さなかった。ユウイの表情が不安で強張っていく。まさか、と思った。これは、街の人に、無視をされているのではないだろうか？

不安な気持ちを振り払うように、駆け足でカルテの家の前まで来ると、ユウイは玄関の扉を叩いた。はい、と中から声がして、ユウイはほっと息をついた。

軋む音を立てながら、扉が開くと、中からぼさぼさ頭の中年女性が顔を出した。カルテのお母さんかしら？　ユウイがおはようございます、とあいさつすると、それとほぼ同時に扉が音を立てて勢いよく閉まった。

ユウイがあっけにとられて立ち竦んでいると、いくつかの視線を感じた。辺りを見渡すと、住宅街の人々がさっと家の中に入っていった。まるで何か悪いものから身を隠すように。

ユウイは急ぎ足で同じ住宅街に住むギガとペテロの家へと向かった。ギガの家の前につくと、家の外で草むしりをしていたおばさんが、ユウイの顔を見るなりそそくさと家の中に入って行ってしまった。家の扉を叩いても、中から誰も出てくることはなかった。ペテロの家は、カルテと全く同じ反応だった。

とぼとぼと、ユウイは住宅街を後にする。噴水広場に辿り着くと、噴水前のベンチに座り大きなため息をついた。

街の人々が、自分を無視している。どうして？

そうか、昨日の事か。ユウイは空を仰いだ。こんなにいいお天気

なのに、噴水広場には誰もいない。ユウイはもう一度大きくため息をついた。街の人たちに無視されるのは気分のいいものではなかったが、何故だか思ったよりダメージのない自分がいた。この街の人たちは、おかしい。七の主より、ずっとずっとおかしいわ。ユウイは頬を膨らませ唇を尖らせた。お腹を好かせた鳩だけが、餌を求めてユウイの周りに集まっていた。

「……おねえちゃん、ひとり、なの？」

噴水広場の鳩たちが、一斉に飛び立った。振り向くと、昨日のボブヘアーの少女が立っている。ユウイは気配無く自分に近づいた少女に驚き、同時に警戒した。

「おねえちゃん、ひとりなのね。わたしといっしょね」

少女は無表情でそういうと、指で地面に絵を描き始めた。髪の跳ねた男の子のようだった。

「……おえかき、すきなの？」

ユウイが恐る恐るそう尋ねると、少女はほんの少しだけ笑い、男の子の絵を完成させた。そうしてなぜか少女は地面を右足で踏み鳴らすと、下を向き小さくため息をついた。

「そのこは、だあれ？　おともだち？」

ユウイが少女に尋ねる。少女は「わからない」と言い、ユウイの顔を見た。

「おねえちゃん、なにがすき？　わたしが、かいてあげる」

少女はまた小さく笑い、しゃがみこんだ。ユウイはベンチからするりと降りて少女の横に並ぶ。この子、怖くないわ。ユウイは昨日の凍りつくようなあの感じはなんだったのかしらと首を傾げた。今自分の横でしゃがみこむ少女は、自分と変わらぬ普通の少女だ。

くまさん。ユウイがそういうと、少女は嬉しそうに地面にくまの絵を描き始めた。上手ね。ユウイがそうほめると、少女は立ち上がりまた右足で地面を踏み鳴らした。

もくもく、とくまの絵を中心に、周囲に煙が広がった。ユウイが驚き尻餅をつくと、消えていく煙の中からぽんと何かが飛び出し、

地面に転がった。
少女がそれを拾い上げ、ユウイの前に差し出した。ちいさなくまのぬいぐるみだった。
「これ、おねえちゃんにあげる」
ユウイはそのくまのぬいぐるみを受け取ると、無表情のまま立ち去ろうとする少女に言った。
「まって！　あなた、いったい、だあれ？」
少女が振り向く。
「モモ」
そういうと、少女は大通りに向かって歩き始めた。ユウイは大きく深呼吸すると、くまのぬいぐるみを握りしめ、意を決し少女を追いかけた。

†

夕暮れが孤立した街と、孤立した自分を照らしている。ユウイはとぼとぼと大通りを歩き、カルペディエムを目指した。
カルペディエムの店の前でヨーダが掃き掃除をしている。ユウイが声を掛けようとする前に、ヨーダはこちらに気付いたようだった。
「話があるんだろ。入れ」
ヨーダはそう言うと店の扉を指差した。ユウイは言われた通り店に入ると、奥のテーブル席に着いた。
掃き掃除を終えたヨーダが店の中に入ってくると、ユウイは堰を切ったように話し始めた。昨日送っていった後のカルテの様子はどうだったのか、街の人たちの様子が変わってしまった。昨日のことが原因？　ママは大丈夫なのかしら？　心配なことが沢山ある。
「まずカルテの事だけど、昨日あの後ちゃんと目を覚まして、俺が家まで送ったよ。ごめんねって、お前に謝ってた」

ユウイはほっと息をついた。カルテはちゃんと目を覚ました。それを聞いただけで大分胸が軽くなった。
「昨日の事、お咎めなしって昨日キュリカで聞いたけど。お前の事無視してんのは街の奴らが勝手にやってることだから、わかんねーよ。マーガレットは無視されてないし、たぶん自分たちは関係ないっていうアピールだろうな」
お咎めなし？　ユウイはヨーダに訊き返した。そう、お咎めなし。ヨーダが笑う。
「運がいいな。普通だったら街から追い出されてるのに」
「でも、なんで？　なんでおとがめなしなの？」
なんだ、お咎めありの方がいいのか？　ヨーダが意地悪そうに笑う。ユウイはぶんぶんと大きく首を横に振った。
「色々と、事情があるみたいでさ。まあいいんじゃない？　追い出されなくて済んだんだから」
「……もしかして、きのうの、おんなのこがかんけいあるの？」
ユウイがそう問うと、少し間をおいてヨーダが首を横に振った。昨日のあの空気は、普通じゃなかった。ユウイが再び口を開こうとすると、遮るようにヨーダが言った。
「昨日の奴の事は忘れろ。それより、お前、結局七の主の孫と友達にはなれたのか？今日まだ六日目だけど」
七の主の孫？　友達？　一瞬なんのことを言われてるのか分からずユウイは首を傾げ、ああ！　と大きな声で叫び頭を抱えた。忘れてたのか……。ヨーダが呆れたように笑った。
「まって、あと一日で、なんとかするわ！　なんとか……」
「無理だろうな。昨日の事、他の孫も知ってるし。あいつら仲良しだから、お前が来たって相手になんかしてくれないよ」
まず門番が許可証持っていても通さないよ。ヨーダはユウイの鼻を人差し指で突いた。ユウイは鼻の頭を押さえ、あと一日で主の孫と友達になる方法を考えた。けれど頭がのぼせて何も思い浮かばなかった。

「あと一日残して詰んだな。このままゲームオーバーか」
「まって、あと一日あるわ！　きょうだって、おともだちになってくれたこ、いるんだから、あるじのまごだって、きっと……」
「今日友達に……って、一体誰だよ？」
ヨーダが驚いた様子でユウイを見た。ユウイは腰に手を当て、続けた。
「モモちゃん」
その名前を出した瞬間、ヨーダの表情が険しくなった。
「モモって……モモ・オフワールの事か？」
ユウイが頷くと、ヨーダは深いため息をついた。なんでお前はそう……。呟くようにヨーダが言った。
「あの、モモちゃんがね、おえかきして、足をふみならすと、かいたものが出てくるの。あれはなに？　まほう？　きのうのキャロルのピックも、あれはなに？」
ユウイが興奮気味にそう問うと、ヨーダはまたため息をついた。しばらく考える仕草をして、ヨーダは答えた。
「魔法とは、違うと思う、たぶん。それよりお前は……昨日のモモを見て怖くはなかったのか？」
ヨーダにしては、歯切れの悪い答えだった。ユウイは昨日のモモの様子を思い出し、今日のモモを思い出して、考えた。確かに昨日のモモは怖い、と思った。けれど今日のモモはちょっと無表情だけど普通の女の子に見えた。どっちが本当のモモちゃんだろう？
「こわいけど、こわくないの……」
「意味がわかりません。もういいやどうでも」
ヨーダはそういうと、店の裏に入っていった。取り残されたユウイは明日一日で主の孫と友達になるにはどうしたらいいかを必死に考えた。
頭から湯気が出そうなほど考えに考えていると、ヨーダが店の裏から戻ってきた。手には数冊の本を抱えて。
「カナタから、お前に。約束だからな、一応」

そういうと、ヨーダはユウイに本を渡した。どこかで見たことのある本だわ……。ユウイは首を傾げ、ああ！　と叫んだ。
「塔にいったときに、カナタがわたそうとした本ね！」
ヨーダが頷く。ユウイは一番上の本の表紙のタイトルを見た。見たことのない文字で書かれている。ユウイは本をめくり、中の挿絵を見てあっと声を上げた。
「手で、おはなしする本ね！　でも、どうして……」
「勝負はお前の勝ち、ってこと。塔への行き方を教えてやる。その代わり今後モモと会うな」
どうして！　ユウイはヨーダの言葉に声を荒げた。うるさい、とヨーダが険しい顔で言った。
「いいだろ、当初の目的は果たせたんだ。勝負はお前の勝ち。カナタにまた会える。それでいいじゃないか」
「よくないわ！　そんなの、おかしいもの！」
そもそも何で私の勝ちなの？　ユウイがヨーダに問うても、ヨーダは答えなかった。
「おかしいわ……ともだちって、だれかに駄目っていわれたら、なっちゃいけないものなの？」
「そういうことは、自分で責任が取れるようになったら言ってくれ。どうするんだ？」
カナタを取るか、モモを取るか。ヨーダは険しい顔のままユウイに問うた。ユウイはどうしていいかわからず、目にいっぱい涙をため込んで、ヨーダを見ることしかできなかった。
「こんな小さな子をいじめて、ほんとにお前は悪ガキだのう」
店の裏から声がして、ヨーダが声のした方を振り向いた。ユウイもそちらを見やると、白ひげを撫で付けながらコルトが顔を出した。
「なんだよジジ。口出しすんな」
「おお、こわいこわい。こわくて禿げあがってしまったわ。このままでは冬が越せん」
禿は元からだろ。ヨーダが突っ込むと、コルトは「ほうれ意地悪

じゃ。また禿げた」と自分の頭を撫でた。どうでもいい。ヨーダは心底どうでもよさそうに言った。
「おじょうちゃんは、二人とも、友達だと思っとるんじゃ。二人とも友達でいいじゃあないか」
「ふざけんなジジ、それがどういうことかわかってんのかよ」
ヨーダがコルトを睨み付けた。コルトはそんなヨーダの頭をぐりぐりと撫で、言った。
「なにかあったら、すぐ逃げなさい。そしてすぐわしに報告すること。それを条件にしよう。いいかね？」
コルトはヨーダに振り払われた手で、今度はユウイの頭を撫でた。何かあったらすぐ逃げる。何かってなんだろう。そう疑問に思うも、ユウイはコルトに大きく頷いた。
「勝手に決めんな。ジジ、あんた」
「責任はわしが取るよ。ちいとばかし、様子を見てみんかの？」
お前は余裕があるようで余裕のない奴じゃの。コルトがそういうと、ヨーダは着けていたエプロンを外しレジの上にほおって店の裏に入っていってしまった。怒ってしまったのだろうか。ユウイがヨーダを呼びとめても、返事がなかった。
「のうおじょうちゃん。もうひとつ約束しておくれ。カナタの前で、モモの話はしないでくれんかの？」
どうして？　ユウイがコルトに問うと、コルトは真剣な顔になり、ユウイに言った。
「そうじゃのう……二人は、ほんの少うし仲が悪いというかの、喧嘩をしておるんじゃ。ちいとばかし拗れておる。これは二人の問題じゃからのう、仲直りが済むまで、ほっておいてやってくれるかの？」
そうか、喧嘩か。ユウイは「わかったわ」とコルトに頷いた。すると店の奥からヨーダが現れ、ユウイに紙を一枚手渡した。その紙には、街の路地裏の地図と、その上に一筆書きの蝶の絵が重なるように描かれていた。

「その方法でしか、路地裏は抜けられない。後は自分で考えろ。街の奴らは総スパイだから、くれぐれも見つからないように気を付けるんだな」
ヨーダはそれだけ言うと、また店の奥に引っ込んでしまった。ユウイは「ありがとう」ともう姿の見えないヨーダに言った。
「よかったのう。カナタもきっと楽しみにしとるよ。お前さんが遊びに来てくれることを」
コルトはそういうと、ユウイの頭を撫でた。ユウイはぺこりと頭を下げると、すっかり暗くなってしまった外を見て、慌てて店を出た。
店を出ると、ほんの少し世界が変わって見えた。ようやくカナタに会えるんだ。
けれど、カナタとモモは仲が悪い。その言葉を思い出し、ユウイは肩を落とした。
きっと、カナタなら、誰か一人でも友達が出来たと伝えたら喜んでくれたに違いないのに。預かりっぱなしの願い羽根に、一体何を届けてもらおう。
それに、何故急にヨーダはカナタと友達になることを許可したのだろう？　考えることは山ほどあった。
薄暗い大通りを歩いていると、ペテロとギガの二人が歩いているのを見かけた。二人はユウイの姿を見つけると、一目散に逃げ出した。ユウイはそれを追いかける。街の人々はユウイの姿を見ると隠れてしまう。それは変わらない。
これから先何があるかなんてわからないけれど、絶対に、諦めて後悔することだけは嫌だわ。明日はまたカルテの家に行こう。何度目の前で扉を閉められても。
煌めき始まった星空の下、ユウイは全力で走った。掴めないものなんて、きっとない。ヨーダから受け取った地図を握りしめながら、いつかきっとこの星空さえ、掴めそうな気がした。

s
t
r
a
y

c
r
y

b
a
b
y.

0
1.
.
.
.

e
n
d.

stray cry baby. 01.（後書き）

ご意見ご感想はお気軽にどうぞ。
一言でも喜びます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0087ba/

†路地裏の風使い†　stray cry baby.

2011年12月31日03時50分発行